

Title	三木清と日本のフィリピン占領
Author(s)	平子, 友長
Citation	遺産としての三木清: 304-363
Issue Date	2008-03
Type	Book
Text Version	author
URL	http://hdl.handle.net/10086/15761
Right	

所収：清真人、津田雅夫、亀山純生、室井美千博、平子友長『遺産としての三木清』、同時代社 2008 pp.304-363 (全 394 頁)

三木清と日本のフィリピン占領

平子友長

はじめに

「歴史の後知恵」という言葉がある。歴史の結末を知り得たものは、行方も知らぬ歴史の濁流に流されている登場人物よりも歴史の意味をより良く把握することができるという了解が、そこには含意されている。しかし「後知恵」を持つ者は、えてして歴史を結末に向かって突進してゆく過程として歴史を単純化して捉えがちである。これまでの三木清研究も、三木清が日本の敗戦から一ヶ月以上経過した九月二六日豊多摩刑務所内で獄死したという事実の衝撃に影響され、日米開戦以降の三木の生涯全体を天皇制権力のいたましい犠牲者ないし敗北者として描き出すことが、習わしとなっていた。

筆者は、例えば、戦後の三木清研究を代表する論者たちの次のような発言を念頭に置いている。

最晩年の時局評論を収録した全集第一四巻～第一六巻の編者である久野収は「全集第一四巻後記」の中で次のように記している。

「本巻に集められているのは、著者が戦局のとめどのない拡大に影響されながら、各種の雑誌、新聞、講座の求めに応じて執筆した戦時評論である。時期的には、…昭和十三（一九三八）年から昭和十八（一九四三）年十一月、著者がフィリピンへの強制徴用から帰還し、戦局の前途に絶望してペンをおく直前までにわたっている。…著者の周囲では、戦争に批判的な思想運動や文化運動への抑圧は、戦局の進行とともにげしさをくわえ、広い意味のマルクス主義をよりどころとした思想流派は、ほとんどすべて検挙、投獄され、表現の自由を奪われてしまっていた。…同年〔一九三八〕十月には、自由主義の代表的理論家と見なされていた河合栄次郎が東大を追放され、やがて起訴されなければならなかった。著者が思想取り締まりの犠牲にならなかったのは、近衛文麿のブレーン・トラストの役割を演じていた『昭和研究会』…の中心メンバーの一人であったという事情と、ロシア・ボルシェビキ型マルクス主義からする著者への正面的批判がかなり公然化されていたという事情にもとづくのではないかと思われる。しかし真相はよくわからない。…戦争に対して、行動はもちろん、思想によってさえ批判し、抵抗する道はますます深く閉ざされていた。残されているのは、戦後の準備にすべての責任をかけて沈黙をつらぬく道か…それとも、戦争にすべての責任をかけて、戦争の意味転換をはかる道かのどちらかである。著者が選んだのは、戦争に責任をかける道であった。…全体戦争としての戦争性格は、著者たちのくわだてたような戦争目標の理想主義的意味づけを全面的、現実的勝利…のための手段やそえものにおわらせる傾向をますます強め

ないわけにはいかない。…年代順に集められた著者の評論を読みすすんでゆけば、著者の意味づけの敗北過程は、著者ほどの才能をもってしても、どうすることもできなかった事情があきらかになるであろう。全体戦争は、予防する以外に、いかなる臨床的処置も絶望的であり、またどれほど精神衛生を重んじて感染をまぬかれにくいからこそ、全体戦争なのである。」（一四、五八五―五八九頁^一、傍点は筆者）。

久野収は、「第一五巻後記」の中では、同巻所収の論文「知性人の立場」（一九三八年七月）から以下の文章を引用しつつ、戦時中の三木について次のような評価を下している。

「『今や日本のインテリゲンチヤにとって思想はただ現在の日本に課せられている現実の問題の解決を通じてのみ可能となるに至った。我々がどれほど独創的であり得るかが、日本の運命と共に試練される時が来たのである。…知識階級は協力すべし。だが協力はあくまで知性の立場からの自発的な協力でなければならぬ。…』

著者のこの立場を心にとめながら、本巻〔第一五巻〕全体を読みすすむ時、著者の立場の敗北の印象はやはりぬぐいがた [い] …。“特高”警察や“検閲”警察のするどい監視のただ中で、また民間において、“思想告発”を本業とした一部右翼の十字砲火のただ中で、著者はこれらの論文を執筆しているのである。伏字のない論文といえども、…かえって著者の細心の注意が伏字をまぬかれる表現に結晶したにすぎないのである。…著者の直面した状況は、戦後の現在からでは、ほとんど理解できないような“狂気”の時代状況であったという事情は、忘れられてはならない。」（一五、六二八～六三〇頁、傍点は筆者）。

久野によれば、戦時下の三木の文章は、それが三木自身の本音を表現していると思しうかぎりでは「敗北」過程の記録であり、それ以外は「著者の細心の注意が伏字をまぬかれる表現に結晶したにすぎない」、つまり検閲を意識して心にもないことを書いたものにすぎないと解釈される。

全集の主要編集者であった梶田啓三郎も、久野の上記の評価を受容しつつ、以下のよう述べている。

「著者〔三木〕が筆を折って沈黙を守ることなくあえて時局迎合者と見誤まれかねない危険を冒して細心の偽装下に空しい『抵抗』をつづけながら一步一步と後退を余儀なくされて行く痛ましい敗北の過程についても、その本質的な点は、第一四巻後記の久野収氏の文章でつくされているから、蛇足を加える必要はあるまい。筆者はただ、著者の真の究極的な立場はあの非業の死が何より雄弁にこれを物語っているということに、あらためて読者の注意を促すにとどめよう。」（梶田啓三郎「全集第一七巻後記」、一七、六五七頁、傍点は筆者）。

三木の「真の究極的な立場はあの非業の死が何より雄弁にこれを物語っている」という梶田の評価は、三木の思想と理論を、「究極的」には三木の「非業の死」に結びつけて解

一本稿において、三木清からの引用は『三木清全集』（全二〇巻、岩波書店、一九八六年）を用い、引用箇所は巻数とページ数のみで示す。

釈するという戦後三木解釈の主要パラダイムとなった。それにそぐわない三木の言説は、「細心な偽装」か「空しい抵抗」と解釈されてきた。

久野収と共に、三木や京都学派の戦時活動についての戦後のパラダイムを形成した一人である山田宗睦は、三木がフィリピン徴用時代に寄稿したエッセイ「比島人の東洋的性格」について次のような評価を下している。

「『比島人の東洋的性格』〔一九四三年二月『改造』、第一五巻〕は、権力が独立した思想家に強制した圧迫のむごさをしめしている。…権力が自己に反抗するものにくだす執拗な憎しみが、そこに顔をのぞかせている。」（山田宗睦 一九七五、一四三頁、傍点は筆者）。

本稿において筆者は、三木清の生涯の最後の数年間をこのように犠牲者ないし敗北者として描いてきた支配的な三木像を克服するために、フィリピンに徴用されていた時期の三木の活動と思索を日本軍によるフィリピン統治の実態^二と関わらせながら考察することを試みた。

一. 日本のフィリピン占領の特殊性

日本が一九四二年一月二日フィリピンを占領したとき、フィリピンはすでに宗主国アメリカ合衆国によって一九四六年の独立を約束された自治植民地コモンウェルス **Philippine Commonwealth**(一九三五年発足)であった。従ってアジアを西洋列強の植民地支配から解放するという大東亜共栄圏の主張は、フィリピンでは根拠を持たなかった。マッカーサー **Douglas MacArthur** 最高軍事顧問の指導下に整備を進めていたフィリピン陸軍は、一九四一年七月、ローズベルト **Franklin D. Roosevelt** 大統領の命令により、マッカーサーを司令官とする米国在極東陸軍 **USAFFE(United States Army Force in the Far East)**に統合された。日本軍のマニラ占領（一九四二年一月二日）後、マヌエル・ケソン大統領とセルヒヨ・オスメニャ副大統領は米国に亡命し^三、その後フィリピン全土で亡命政府と宗主国に忠誠を誓う激しい抗日ゲリラ運動が展開された。

^二本稿における日本のフィリピン統治の実態に関する記述は、中野聡教授（一橋大学社会学研究科）の研究（中野一九九六、一九九七、二〇〇二、二〇〇六、二〇〇七）に全面的に依拠している。中野教授からは、著書、論文を通して、また研究会での議論を通して、日本のフィリピン統治の歴史とその意義について多くのご教示いただいたのみならず、陸軍報道班編集の資料、従軍作家たちの従軍記録等、今では入手が困難な同時代の諸資料を閲覧させていただいた。これらのごことに対して、この場をお借りして深い感謝の気持ちを表明したい。また軍および軍人に関する事柄において、吉田裕教授（一橋大学社会学研究科）からも貴重な教示をいただいた。吉田教授にも、心からお礼申し上げる。

^三一九四一年一二月二三日、マッカーサーがマニラ防衛を放棄してコレヒドール要塞に退却する際、合衆国政府は、ケソンの同行を強く求めた。「ケソンは同行に強い難色を示したが、ケソンと日本の取引を恐れる合衆国政府の意志はきわめて固く、側近のホルヘ・B・バルガス官房長官を『マニラ』市長に任命して『日本に忠誠を誓う以外のあらゆる方法を用いて国民の苦難を和らげるため努力する』よう閣僚に指示したうえで、オスメニャ副大統領と共にコレヒドールに脱出、…五月にはワシントンDCに到着した。その後、再び故国の地を踏むことなく、一九四四年八月に死去した」（中野二〇〇七、一四七頁）。

日本政府は、建前上は、フィリピンに対して米国依存の「過去の清算」と「大東亜戦争の完遂」への積極的協力を独立付与の条件として要求した。しかし現実の占領統治においては、コモンウェルス自治政府（一九三五年発足）を支えてきたエリートの支配を温存させた。一九四二年一月二三日ケソン大統領の官房長官であったホルヘ・バルガスを長官とする行政委員会が発足し、四三年一〇月一四日にホセ・ラウレルを大統領とするフィリピン共和国が「独立」した^四。対日協力政府の閣僚たちは、米国式教育を受けたエリートであり、ラウレルら少数を除けば思想的にも親米的であったが、比島派遣軍〔陸軍第一四軍〕指導部はこれを敢えて容認する政策を取った。

日本のフィリピン統治の特殊性を考察する上で重要なことは、占領を指導した日本人指導者の多くが、欧米の大学への留学や長期の外国勤務の経験を持ち、アメリカの国情にも通じた国際経験豊富なエリートたちであり、宥和的な統治政策を支持する人々が多かったことであった。後述する村田省蔵（比島派遣軍最高顧問）、浜本正勝（ラウレル大統領特別顧問）、武内辰治（比島調査委員会補助委員）らがその代表格であった。

フィリピン統治にあたった第十四軍の司令官は、以下の四名であった。

（一）本間雅晴（初代、一八八七～一九四六、中将、在任期間一九四一年十一月六日～一九四二年八月一日、一九一八～一九二一年イギリスに駐在、一九四六年「バターンの死の行進」などの責任者としてマニラで処刑）。

（二）田中^{しずいち}静菴（二代、一八八七～一九四五、在任時中将、後に大将、在任期間一九四二年八月一日～一九四三年五月一九日、オクスフォード大学留学、メキシコ公使館付武官、アメリカ大使館付武官を歴任、陸大校長兼東部軍司令官として終戦を迎え、八月二四日自決）。

（三）黒田重徳（三代、一八八七～一九五四、中将、在任期間一九四三年五月一九日～一九四四年九月二六日、イギリス駐在（大尉）、インド駐劄武官（大佐）、一九四七年七月終身刑の判決を受けるが、一九五二年二月仮釈放され帰国）。

（四）山下^{ともゆき}奉文（四代、一八八五～一九四六、大将、在任期間一九四四年九月二六日～一九四五年八月、一九一九～一九二二年スイス・ドイツに駐在、一九二七年オーストリア大使館兼ハンガリー公使館付武官、一九四六年二月処刑）。

上記四名の司令官は、敗戦後、占領統治の責任を問われ、処刑または終身刑という厳刑に服する結果となったが、日本軍によるフィリピン統治がフィリピン住民に対する圧政と殺戮に終始していたわけではなかった。このことは、本間や山下と同様、死刑の判決を受

^四 日本軍政下の「フィリピン共和国」（一九四三年一〇月～四五年八月）は、「戦後長年にわたって『傀儡共和国 Puppet Republic』と呼ばれてきた」が、「近年では独立革命当時のマロロス共和国を第一共和国としたうえで第二共和国と呼ぶことが一般的になりつつある。ラウレルも歴代大統領の一人（しかもとりわけ優れた一人）として扱われている。戦後、米軍に逮捕された対日協力政府要人は、一様に自分たちが選択の余地なくその立場に立たされ、日本の圧制下でケソン〔コモンウェルス大統領〕の指示を守り一国民の苦難を和らげる努力をしたのだと主張したが、…フィリピンでは、この弁明がおおむね受容されてきたと言ってよいだろう。」（中野二〇〇七、一五四頁）。

けるべき地位に就きながら、フィリピン政府側要人の弁護^五もあって、唯一人刑死を免れた黒田重徳の行動からも窺うことができる^六。軍政を直接担った幹部の中にも、英語が堪

五 「戦犯裁判では、協力政府の元閣僚であったバルガスとオシアスが弁護側証人に立ち、とくにオシアスは黒田が英語重視論者で小学校の日本語教育中止に賛成したことや、四人の軍司令官のなかでは『最も軍国主義的でなく』親しみの持てる人物だったことを述べて熱心に弁護した。」（中野聡一九九六、三〇頁）。

六 当時第一四軍軍政監部部員兼参謀のち第一四軍参謀二課長を勤めた吉田長秋は、後に、司令官としての黒田について次のように語っている。

「あの方〔黒田重徳〕は…東条さんとはぜんぜん合わなかったんですね。ことあるごとに『東条はなっとらん』と、悪口ばかりいっておられた。東京から書類なんか来てもぜんぜん見もしないで、ポイと捨ててしまう。そばにいる者が、『閣下、そんなことをおっしゃってはクビになりますよ』と注意しても、『ああ、クビになっても結構。…』と平然としている。よく世間では、黒田さんはゴルフばかりして遊んでおり、フィリピンの防衛などなにもやらなかったと非難されていますが、あれはフィリピンの要人と付き合うためにやっておられたことなんです。そして、官邸ではアメリカ人が置いていった原書ばかり読んでいた。黒田さんが中央の指令をほとんど無視していたのは、東京の連中がフィリピンの実情を知らぬ、知ろうとさえしないということで、腹を立てておられたんだと思うのです。黒田さんの考えでは、ニューギニアがまずやられた。すると、こんどはフィリピンの番だ。だから、十個師団ぐらい送ってくれと東条さんに親展の手紙を書き、…東京に送ったのに、中央からは…現有師団で十分だといってくる。…治安が悪ければ、兵力の半分は治安対策に残さなければならない。…そういう事情は中央にはちっともわかっていないのです。…東京から、英語とタガログ語ではいかん。フィリピン人に日本語を教え、話せるようにせよ、と行って来たことがあるんです。黒田さんは…『人間は口を閉じることが一番の苦痛だ。英語とタガログ語がいかんということは、フィリピン人に口を閉じろというにひとしい。現地の風俗習慣を重んじないこんなやり方ってあるか』というわけです。そして『自分は原書を読み、マッカーサーのフィリピン統治を一生懸命に勉強している。…なにもフィリピンのことを知らぬやつが、とんでもない思いつきをいってきやがる。そんなことでフィリピンの統治ができるものか』—まあ、こんな調子でことごとく中央には反対でしたね。…いつか、軍用米として内地から米を一万トンほど運んで来たことがあるんですが、軍は半分だけでいい、あとの半分は現地人に配給しろ、といわれたことがある。…十九年になって大本営や総軍〔南方軍〕は、アメリカ軍がフィリピンへ来る場合は、まず、ミンダナオ島に来るという判断を下してきた。だから、ミンダナオを強化しろというわけですが、閣下は…レイテへ来るという意見でした。…〔アメリカは〕必ずやフィリピンの中央のレイテにくさびを打ち込んでくる。それで、すぐ第十六師団をレイテへやり堅固な陣地を作ったから、あれだけ奮戦、もちこたえられたのです。…参謀本部なんか、若手の少佐、中佐クラスが…作戦の立案に当たっているが、あんな実践の経験もないものがやって何がわかる。中將級の歴戦の将軍が班長になって、とりしきるぐらいでないといけない。だから、ニューギニアあたりの、敵も来ないようなところに…五個師団も投入して、みんな見殺しにしてしまっている。そんなむだな兵力の使い方をしているからダメなんだ。…黒田さんは大本営や総軍のいうことなんか聞きやしませんよ。…いよいよ独立ということになって、一番大きな問題は、憲法をどういうふうにつくるか、ということでした。…当時のことですから、お手本ということになると日本の憲法です。蠟山〔政道〕さんなんか、そんなお考えだったようですし、…しかし黒田さんは、『…ともかく、アメリカはフィリピン人をいじめてはいない。善政を施しているんだから、アメリカ式の自由主義的な憲法じゃないといかん』といいましてね。だから、この方針を受けてできあ

能で、アメリカ合衆国およびフィリピンの事情に精通していた人材が少なからず存在した。

第一四軍司令部がこのような宥和施策を進める上で好都合であったことは、陸軍参謀本部自身も、日米開戦以前の時点では、東亜共栄圏内部におけるフィリピンの経済的価値をほとんど評価せず、占領の最大の目的を「米軍ノ根拠地覆滅」に置き、できればケソン自治政府をまるごと懐柔するという方針を立てたことであった。

しかし日米開戦後の同年一二月二日策定の『南方経済対策要綱』では、フィリピンは「蘭印、英領馬來及ボルネオ」とともに資源開発・取得の重点地域に指定された。これとともに本土の東条政権と現地軍政監部との間の確執が水面下で進行していった。同時に、第一四軍指導スタッフの内部では、軍指導部と現地軍の指揮に服さない憲兵隊との確執および職業軍人と村田や浜本等文官として派遣されたスタッフとの間のフィリピン統治政策をめぐる確執が、繰り広げられていった。本土政府・参謀本部、現地軍政監部、憲兵隊、文官たち、それにケソン大統領の密命を受けたフィリピン側要人たち、これら五者がそれぞれの思惑をもって駆け引きを繰り返しながら、日本のフィリピン統治が進行していった舞台裏の一端を『インタビュー記録』（一九九四）は生々しく伝えている。

ケソン政権を丸ごと懐柔するという構想は、ケソン大統領の亡命により成功しなかったが、対日協力政府の閣僚はケソン政権のそれを引き継ぐものであった。第一四軍司令部は、黒田重徳に典型的に見られるように、「比島行政委員会」、独立付与後の「共和国」政府指導層との関係を良好に維持することに腐心した。

日本敗戦後、ラウレルを大統領とする「共和国」政府閣僚は、「マッカーサーの介入によって免責されたロハスを除く全員が特別国民裁判所 People's Court に国家反逆罪で起訴された。しかし、翌四六年に共和国初代大統領に当選・就任したロハスは、四八年一月二八日、大統領特赦令に署名、…当時存命の全員が赦免され…、その多くが、その後も一九五〇年代を通じて国家の指導的立場に座り続けたのである。」（中野、一九九六、三七～三八頁）。

がった共和国憲法というのは『日本国憲法とアメリカ憲法の中間的な』ものだったわけです。…独立とともに、軍政監部はなくなり、わたしが課長になった参謀二課が…すべてを指導していくことになったのですが、このときも黒田さんは、わたしを呼んで、『独立したら彼らの国なんだ。おれたちは人の家を借りているんだから、…いままでどおりではいかんぞ』と注意してくれました。」（『昭和史の天皇』第一一巻、二一五～二一八頁、傍点は筆者）。

七一九四一年三月陸軍参謀本部第一部研究班が立てた『南方作戦ニ於ケル占領地統治要綱案』第六項「対米戦争ニ伴フ比島処理方策案」は、次のように述べられていた。

- 一、比島作戦ハ…米軍ノ根拠地覆滅ヲ主トシ比島ノ物資獲得ヲ重視セス。
- 二、…比島現政府ヲ敵側ニ立タシメサル方策ハ之ヲ講スルモ縦ヒ敵側ニ立ツ場合ニ於テモ作戦軍ハ…抵抗ヲ排除スル外所謂「比島勘定」ノ為ノ作戦ヲ行ハス…。
- 三、何レノ場合ニ於テモ作戦軍ハ…比島政府指導援助ノ外直接統治ニ干与スルコトナシ」。

更に第七項『比島処理方策案説明書』においても「比島ハ之ヲ手ニ収ムルモ獲ルトコロ僅少ニシテ却テ係累ヲ増スモノナルガ故ニ物資獲得ノ為ナラハ必需資源トシテ麻及銅ヲ貴重トハスルモ作戦ヲ実施シ全島ヲ征服スル迄ノ価値ナキモノトス」と位置づけられていた。

こうしてフィリピンにおいては日本の占領以前、占領期、戦後共和政期にわたって、同じエリート層がフィリピンの政治を支配し続けた。

日本本土において狂信的な国体論が猛威をふるい、現実的な国際認識に基づいて政策を決定する可能性を封殺しつつあった当時、むしろ日本軍による軍政が敷かれていた外地においてはかえって、占領統治という制約の枠内ではあるが、現実的かつ合理的な統治行政を追求する可能性がわずかに存在していたこと、事実またその可能性を真剣に追求した人々が日本側、フィリピン側双方に存在していたという事実は、忘れてはならないだろう。

二. 陸軍宣伝班・報道部の活動

日本のフィリピン占領の特殊性を象徴するものとして、陸軍報道部および宣伝班の活動も紹介する価値がある(陸軍宣伝班は一九四二年七月陸軍報道部と改称された)。これは、三木清の戦争経験を理解する上でも極めて重要である。なぜなら三木は、マニラの陸軍宣伝班に配属されたからである。

報道部には五人の報道部長が歴任した^八。特徴的なことは、この役職には英語をはじめ外国語に堪能で、国際経験も豊かな将校が代々就任したことである。特に、四代目、斎藤二郎大佐は、少年時代をハワイで過ごした経歴を持ち、陸軍きっての英語通であり、フランス語にも堪能であった。また五代目、秋山邦雄中佐も英語、フランス語に堪能であった。

東南アジア占領地域における軍宣伝活動においては、第一段階として、治安回復・民心安定・日本軍への信頼感獲得を目的とし、第二段階として「東亜解放の真義を徹底」させる教化宣伝が目指されていた。後者の教化宣伝を遂行するために、多数の作家・芸術家・メディア関係者などが国民徴用令によって徴用された。フィリピンへも、石坂洋次郎、尾崎士郎、今日出海、三木清、火野葦平などが徴用され、「新比島建設の意義」を説いた。一九四二年四月三日マニラのフィリピン放送局より英文で放送された三木の「日本の歴史的立場」もこの目的のために書かれた。しかしこうした教化宣伝が多少とも効果をもたらしたような地域は、事実上、マニラに留まり、地方での軍宣伝活動は、第一段階の治安維持を目的とする活動に限定されざるをえなかった。

宣伝班・報道部の活動を実質的に企画立案し、実行を指揮していたのは、人見潤介^九と望月重信^{一〇}らの若手将校達であった^一。地方における軍宣伝の実情を典型的に示している

^八五人の報道部長は以下の通り。初代 勝屋福茂(中佐)、二代 中島義雄(参謀)、三代 古川一治(参謀)、四代 斎藤二郎(大佐)、五代 秋山邦雄(中佐のち大佐)

^九人見潤介は、一九一六年京都府に生まれ、一九三六年宮津で青年学校・小学校兼任教師として赴任した後、一九三六年近衛歩兵第二連隊に入営、一九三八年少尉に任官した。関東軍満州独立守備隊第一二大隊に配属され、中国東北地方北部山岳地帯で共産党系ゲリラ・東北抗日聯軍の「討伐」に従事した。一九四一年十一月第一四軍宣伝班要員(大隊本部付情報主任中尉)に任命され、以後敗戦までフィリピンにおける軍報道宣伝業務に従事した。

^{一〇}望月重信は、東京帝国大学大学院支那哲学科出身の異色の軍人で、盛岡予備士官学校を主席で卒業し、教育総監賞を受賞した。第一四軍では宣伝班・報道部少尉として勤務した。

のが、人見宣伝隊の地方巡回^一であった。

中野聡によれば、「人見宣伝隊は、フィリピン人に対しては、『プロパガンダ・コア』という直訳〔宣伝班の〕が与える悪印象〔フィリピンでは「嘘つき部隊」を意味する。『インタビュー記録』五二三頁〕を避けるためにふつう『親善使節(Goodwill Mission)』と名乗り、各地で『日比親善大会』を催して、音楽・歌・映画などの実演や、施療・施薬活動などを行い、住民感情を和らげようと試みた。その多彩な活動のために、宣伝隊には在留邦人や記者・写真家・小説家などの日本人だけでなく、歌手・映画技師・弁士・医師など多数のフィリピン人が参加した」（中野一九九六、四〇頁）という。

人見はバタンガス地方を巡回したとき経験したある事件から「東亜共栄圏」や「日本精神」の教化宣伝がフィリピン人に対しては無意味であることを実感したという。

人見隊のバタンガス州巡回には、人見とともに宣伝班・報道部の活動を切り盛りしていた望月重信が加わっていた、望月は、皇道主義者渡辺薫美の弟子と称し、自らは熱心な皇道主義者ではあったが、決して狂信的な人間ではなく、企画班（尾崎士郎、石坂洋次郎、三木清、火野葦平、佐藤嘉四郎）を主宰し、人の意見にも良く耳を傾けるので人望が厚かった。

この望月が、ある村で演壇に立って演説を始めた時のことである。通訳には、バタンガス州の大地主の一族出身で日本留学経験もあったフリオ・ルース〔名古屋の医学専門学校を卒業後、医者になる〕であった。望月の演説はきわめて難解で、ルースは最初のうち通訳に困った様子であったが、やがて聴衆は盛んに拍手を送るようになったという。（中野一九九六、四一頁）。ここから先は、ふたたび人見潤介の発言を紹介しよう。

望月は、タガタイにフィリピン人青年のための全寮制の学校を設立し、第一期生（一九四三年六～八月）、第二期生（一九四四年四～八月）を輩出したが、その途上、一九四四年五月強盗団により殺害された。

一 当時の宣伝班・報道部の雰囲気について、人見潤介は次のように語っている。

「宣伝班長の勝屋中佐という人が『俺はなにも知らん。ひとつみなで考えてやってくれ』とこう言われるんです。これは非常に無責任なようだけれども、結果的にみますと、軍隊には珍しく非常に民主的なやり方ができたわけです。それで、仕方がないから…望月少尉が奔走して、徴用員の中の重鎮的存在であった尾崎士郎氏を中心にして、企画班を編成し宣伝の大綱を決め、逐次実施に移して行きました。宣伝の基本方針としては『なんとしても大東亜戦争の意義を鮮明にし、大義名分はしっかりせないかん』というようなことで、大方針みたいなものを打ちだす。勝屋班長が…細かいことに口だしされなかったのは非常によかったなど、私〔人見〕はあとで思いました。」（『インタビュー記録』四九〇頁）。

後で紹介する尾崎士郎、今日出海の陸軍宣伝班に対する評価との落差に注目してほしい。

二 人見宣伝隊は、バタンガス州巡回（一九四二年一月二六日～二月八日）、ビコール地方巡回（四二年二月二七日～三月九日 この巡回は、石坂洋次郎『マヨンの煙』に描かれている）、山岳州およびイロコス州巡回（四二年四月二五日～八月一八日、第六五旅団〔奈良兵団〕に配属され、北部ルソン敗残兵投降工作を主目的とする巡回であった）、パナイ島での対ゲリラ工作（四二年一〇月～四三年五月）などの地方巡回を行った。

「ところが、そんなむづかしい話はルースさんは全然通訳できないわけですよ。だから、ルースさんは、汗を拭き拭き、…『日本に留学していたときに、僕は見たことがある。デパートに行って忘れ物をした人がある。ところがあとで、忘れ物をしたと気がついて行ってみると、日本だったらちゃんとその忘れ物をおあずかりしていましたと行ってでてくる。フィリピンでは、…そんなものでくるためしがないではないか、日本人はそれほどみんな正直で立派なんだ』とこういう話をしていたのです[笑]。…結局、むづかしい話をしてもわからんのですね。通訳も…正確に通訳出来ないし、通訳できても一般大衆には理解できないのです。」（『インタビュー記録』五〇四頁）。

この出来事は、尾崎士郎（『人生劇場 離愁篇』一九七二年、一四六～一五二頁）、石坂洋次郎（『昭和史の天皇』第十一巻、一五六～一五九頁）も紹介しているが、内容に若干の相違がある。

地方の宣伝活動では、タガログ語で話しかけることが重要であったが、通訳を務めた在留邦人はフィリピンに来て以降日常生活を送る中から自然にタガログ語を修得した人たちであった。彼等は、日常会話はできるが、大東亜共栄圏の理想といった抽象的な理念を通訳することはできなかった。人見たちは、この事件を契機として「地方の一般住民には、そんなこと[大東亜共栄圏の理想云々]を直接言う必要もないし、言っても理解出来ない」、「もっと日常生活につながったことで、損得の問題とか、そういうことから話したほうがよい」（『インタビュー記録』五〇五頁）ことを痛感し、住民を悩ませている日常の問題の処理や映画や歌唱ショーなどの娯楽活動、さらに医療活動などに巡回活動の重点をシフトさせていった^{一三}。

宣伝工作の内容は、日本への支持を求めるよりも、むしろ事態を静観して欲しいという方向に置かれるようになった^{一四}。

人見たちが一番困ったことは、大本営から派遣される日本人作家たちにこうした宣伝活動の実態を本国に報告されることであったという。ふたたび人見の発言を紹介しよう。

「私がパナイ島でゲリラ工作をやっているときに、大本営から派遣された川上喜久子さんと阿部艶子さんという女流作家と新聞社の人、パナイ島に来られたのですが、…軍宣伝班の宣伝工作の実情をぜひみたいと言われた。これにはほんまに困って。日本で

^{一三} 「日本軍主催のミーティングにでると歌手の歌が聞ける、映画もみられるというので、多いところでは二〇〇人も三〇〇人も集まりました。」「宣伝隊には憲兵も同行していて、…第一には、日本軍人の非行がないか、からはじまって、いろいろ調べて行きます。」（『インタビュー記録』五〇七頁）。人見隊は、日本軍が教会の境内に馬をつないで馬糞だらけにすることを止めさせる、不当に価格をつり上げた在留邦人の商人にもとの価格で販売することを要求するなどの措置を執った。「元米比軍の比島人軍医を二人配属してもらって、行く先々の村で、無料診療所を開設・施療をしたのです。…全部無料ということで、非常によろこばれました。」（同、五一頁）。

^{一四} 「ゲリラも、いま兵器を持って投降すれば、全部、良民として、釈放して、自分の家で安心して百姓ができるようにする。…というかたちで説得していきました。それはもう、つぎからつぎへと投降してきました。…私どもは、…どんな投降者も一人も殺さずに、一応の事情聴取を終えると、約束通りすぐ釈放した」（同、五一頁）という。

は、『今度の戦争の意義はこうだ』なんて、やいやい言うているところですからね。現地で、『…日本軍に反抗したらこんなとぼっちりがきて損だから、こんなことしないほうがいいよ』、というような幼稚な話ばかり毎日しているのだったら、…むちゃくちゃに言われるだろう。大本営も現地の事情は知らないのだから、きついお叱りをうけることにもなりかねない。それで私は前の晩から、通訳の人に、『明日はいつもと違ってたいへんむずかしいことを言うけれども、君が、民衆に言うことはいつも通り言うてくれ、そして、私の言うことはぜんぜん無視してやってくれたらよい』と言って、私はもっともらしく、その大本営の人にわかるようなことを言う、通訳の人は、…『おまえらこうしたほうが得だよ』と、冷や汗流しながら、やりました。結局、現地の状況なんかわかっていただけないですよ。そんなことを繰り返しながら、現地人とやってきたわけです」（同、五〇五～五〇六頁、傍点は筆者）。

ここで名前を挙げられている阿部艶子は、旧姓三宅艶子、大叔父が有名な三宅雪嶺にあたるため、南次郎大將はじめ陸軍の大物に目を掛けられる存在であった。彼女は、一九四二年十一月から四三年四月まで、一般の作家たちとは違って徴用ではなく、陸軍省派遣の特使待遇でフィリピンを訪問した。その時の経験は『比島日記』（一九四四）に記されている。阿部が軍上層部に知己が多いだけ、人見たちの心配は単なる杞憂ではなく、要注意人物として薄氷を踏むような思いで対応したであろうことは、容易に想像できる。

さてこの時の訪問を当の阿部艶子自身は、どのように描いているだろうか。

「わたしなんか、…戦争には勝っているという気持ちもありますからね。知らない南の国が見られる、せつかくの機会だから、ちょっと見物に行っておようかな、…そんな気持ちで『行きます』といったんです。」（『昭和史の天皇』第十一巻、一七四頁）。興味深いことに阿部『比島日記』の中に、人見潤介は「H中尉」という名前で登場する。それは、パナイ島イロイロ市における滞在記録の中であった（阿部、一九四四、一七一～一八九頁）。

阿部の文章には、抗日ゲリラとの激戦が続く危険地帯に足を踏み入れているという切迫感はほとんどなく、ほとんど当たり障りのない感想が綴られている。うがった見方をすれば、現地スタッフの隠蔽の努力がいかにか成功していかを、阿部の牧歌的な文章は示しているかもしれない。客人扱いされる作家の従軍記録とは所詮そういうものかも知れない。以下に『比島日記』の核心部分を紹介してみたい（括弧内は筆者によるコメントである）。

「部隊本部に行き、午後からはサンミゲルという町に H 中尉を訪ねることになった〔ここから H 中尉の苦心の演出が始まる〕。H 中尉はマニラの報道部にいて活躍された方で、マニラからいろいろ言伝を持って来ているのだった〔H 中尉が現地の抗日ゲリラに対する宣撫作戦の陣頭指揮に当たっていることは隠されている〕。報道部でこの辺の様子についての話をきいたりする〔どうい話を聞かされたかは、阿部の文章が雄弁に物語っている。ここはかつて米軍との間に激しい戦闘が交わされたが、今はいたって平和で、住民は復興に勤しんでいるといった具合である〕。」（同、一七二頁）。「H 中尉はイロイロ滞在中の私達の予定を作って下さり、一緒に自動車でイロイロに出でいらつした〔すべて監視していたということであろう〕。」（同、一七四頁）。

それでも行間の所々に不気味な雰囲気のにじみ出ている。

「近くの教会の鐘の音がカランカランと夜中でも一五分おきに鳴っているので、浅い眠りしかとれなかった〔日本軍兵士を疲弊させるための抗日ゲリラの作戦か、それとも何かの暗号か〕。」(同、一七五頁)。

現地スタッフの過剰なまでの接待ぶりが、つい露呈する箇所もある。

「警備隊は壊れた小学校の中にあつた。窓ガラスの代わりにトタンが打ちつけてあり、随分不自由を忍んだ建物であつた。板の間に昼寝をしていた兵隊さんが、私達に果物を切つて来て下さつただけけれど、それがたんねんに都会の喫茶店か何かのようにきれいにお皿に並べられているので、これも突然の来訪者に対しての歓待の気持ちのような気がして有難く、すぐには手がつけれなかつた。」(同、一七三～一七四頁)。

阿部と川上は、「朝だけは食事を出すと、報道部の人からきいていた」のに、ホテルの主人は「食事は上げない約束で泊めた」と主張して譲らず、二人は仕方なく街に出て食堂を探したが、なかなか見つからない。「やつのことで…珈琲屋のようなもの」(一七七頁)を探しあて朝食を食べた。その翌日のことである。

「朝の食事に又街の珈琲屋に行こうとしていると、主人が出て来て、今部屋に食事を出すという。昨日はあんなに云つたのにと、訳がわからなくなる。…跣足のボーイの運んで来た食事と云えば、朝なのに大きなひき肉の焼いたのと卵とパイアと、別のお皿に御飯なので、川上さんと顔を見合わせてしまった。食べていると主人がはいって来て、どうですかお口に合いますかと云う。そして、手をつけない肉を見ると、これは嫌いかと云つてがっかりしたような顔をして出て行つた。初めの日には恐い親爺さんのような気がしたが、親切なのであんなにうるさく云うらしい〔ホテルの主人は前日の失態で報道部から厳しい叱責を受けたに違いない。それを挽回するために翌日は過剰なまでの朝食を提供して名誉挽回を図ろうとしたのだらう〕」(同、一七六～一七七頁)。

阿部と川上には、自分たちが大本営から派遣された要人(=密告者)として、フィリピン人にとっても日本軍現地スタッフにとっても、危険な存在であるという自覚が全くない。現地スタッフの張りつめた気配りを「善意」と「親切さ」と受け取り、約四ヶ月のフィリピン滞在でフィリピンがすっかり好きになって帰国して行く。「あとがき」が傑作である。

「私の旅行の目的は、戦跡と、原住民の新生活建設状態を視察して、内地の人達にそれを知らせること〔それが現地スタッフには迷惑なのである〕、であつた。その役目を、どの程度に果たし得たかわからない〔現地スタッフが必死の隠蔽工作をしているのだから、果たせるはずがない〕が、私にとって思いがけない一つの収穫があつた。それはフィリピンに対しての愛情であつた。…最初陸軍省から突然にお話のあつた時は、…ほんの少しの知識と関心しか持っていなかつた。それが、今では…フィリピンの人の顔、フィリピンの景色、フィリピンの習慣、食物などなどが、極く身近のものに思われる。…私の滞在中の毎日を記したものに依つて、そんな愛情を、ほんの少しでも感じていただきたいと思うのは、私のわが儘であろうか。」(「あとがき」同、二七七～二七九頁、傍点は筆者)。

一九四二年八月頃、日本が「フィリピンの独立を目指すとは宣伝するな」という大本営の宣伝方針変更の命令に対して、報道部のスタッフは憤慨して、大本営の命令に対して「消

極的抵抗」を続けたという^{一五}。

戦後、人見は捕虜収容所に収容された。抗日ゲリラ掃討作戦に従事したという職掌柄、B、C級戦犯として極刑に処せられる可能性は十分存在した^{一六}。しかし人見は、告発されなかった。訴追を免れたことについて人見は、次のように発言している。

「私は、あれだけゲリラといろいろ文通もしていましたから、どこかで告発されても不思議ではなかった。しかし、悪いことはしませんでしたよ。私は、幸いなことには、一人もフィリピン人を殺さなかったし、傷つけなかったし、そういうことで直接告発されるようなことはしていなかったけれども、戦争中ですから、なんくせをつけようと思えば、なんぼでも材料はありますからね。」（『インタビュー記録』五三六頁、傍点は筆者）。

以上、宣伝活動の最前線で活動した人見潤介の『インタビュー記録』における発言を紹介する形で、当時の報道部の姿を描き出した。このインタビューは、敗戦から四五年以上経過した時点（一九九〇年～九四年）で行われたという点で、意識的または無意識的な記憶の取捨選択が行われている可能性は否定できない。しかし読者のために強調しておきたいことは、人見は上記の発言によって自らの従軍活動を正当化しているのではなく、戦争犯罪を痛切に反省し、戦後は平和な日本を守るために努力し続けた人であったということである^{一七}。

人見宣伝隊の活動から窺われることは、現地のフィリピン人との摩擦を極力回避しようとする努力であった。それはフィリピン軍政を統括した第一四軍全体の基本方針でもあつ

^{一五} 「誰がこんなことを大本営で決めたのか。これでは日本の信用もがた落ちではないか、…みんな非常に憤慨しちゃったわけですね。しかし、それは大本営の命令ですから、しかたがないことだったけれども、我々は今後、…〔フィリピン独立を〕否定はしないでおこう、ということにして、消極的抵抗をしていました。比島の独立ということがなければ、我々の比島進攻は、宣伝的には、その意義を失うと考えたんです。」（人見の発言、『インタビュー記録』五一三頁）。

^{一六} 「戦後の東京裁判およびマニラで行われた一連の軍事裁判では、民間人・婦女子に対する強姦・虐殺など、およそありとあらゆる種類の戦争犯罪が告発され、東京裁判では武藤〔章〕（前）参謀長、米軍マニラ裁判では本間正晴・山下奉文両（前）司令官はじめ六九名、その後フィリピン共和国が引き継いだ軍事裁判では一七名に対してそれぞれ死刑が宣告・執行された。死刑判決の未執行者を含めてすべての日本人戦犯が釈放されたのは、一九五三年七月のことである。」（中野二〇〇七、一五五頁）。

^{一七} 人見は、インタビューの最後に次のように発言している。

「『この戦争はアメリカと日本の戦争で、あなたたちにはかかわりのないことだ、仲良くしようよ』といくら言ってみても、そこで戦争が現実に行われるかぎり、…その暴力を背景にした宣伝には、おのずから限界があるということを、大切なときに、ふと思ひ知られることがあるのです。そんなときが、一番哀しかった。」（同、五三六頁）。「不幸な戦争という状況のなかではあったけれど、その間、接した比島の人の明るさ、人なつつこさなどが懐かしく思い出され、そうした人たちにご迷惑をおかけした、償いの思いも含めて、比島の速やかな復興を祈らずにはいられないような思いに駆られるのです。戦争は諸悪の根源です。…二度としてはなりません。」（『インタビュー記録』五三七頁）。

た。しかしこの宥和政策は、占領政策の費用を最小に抑えようとする「もたざる国」の発想に基づくものであり、フィリピン人のアメリカからの分断を民衆レベルで実現するための具体的政策や宥和的状况を維持するための経済的費用はほとんど考慮されなかった。このことが、フィリピン民衆の職業機会の提供、生活保障などの経済的保証を盛り込んだ米軍による抗日民心収攬政策との間に越えがたい落差を産んだ。フィリピンでは、米国在極東陸軍の降伏（一九四二年五月）後も、各地で投降を拒否したアメリカ・フィリピンの将兵を中心に、米軍指揮下の正規軍ゲリラ（いわゆるユサフェ・ゲリラ）が組織されたが、アメリカは、フィリピンの若者たちにゲリラへの志願を呼びかけ、正式登録後、現地指揮官に従って従軍すれば、フィリピン奪回後、従軍中の未払いの給料を全額支給するだけでなく、将来年金も支払うという宣伝をフィリピン全島で展開していった^{一八}。アメリカ軍は、戦後、三三万八〇〇〇人（うち十二万人は正規兵として）をゲリラと認定した。ユサフェに組織されたフィリピン人からなる正規兵・ゲリラは、アメリカ軍の指揮のもと、激しい抗日ゲリラ線を展開した。フィリピン戦では、フィリピン人側の死者は、一一一万人に昇った。一九三九年の国勢調査によればフィリピンの人口は約一六〇〇万人であったから、全人口の約七%の命が奪われたことになる。他方、日本人将兵の死者は約四七万人であった。死亡率は全投入兵力の約七五パーセントにのぼった^{一九}。

合衆国政府および軍の首脳は、フィリピンを迂回して直接日本本土を攻撃する方針を立てていたが、フィリピン奪回を自分の名誉にかけて果たそうとするマッカーサー極東軍最高司令官の強い意志により、フィリピン戦は決定され、ここに太平洋戦争全体を通じて最大規模の死者数を記録する悲劇が生まれたのであった^{二〇}。

^{一八}人見は、アメリカ軍との宣伝戦における敗北についてつぎのように発言している。

「日本軍は占領しても、民衆に対して生活を保障する就職の場をぜんぜん与えてやることができなかった。…やはり…民衆に対して生活の道を与えることができなければどうにもならんな、…これは…宣伝では解決出来る問題ではないということで、アメリカのそういう宣伝がはじまったときに、私個人は非常に敗北感を味わいました。」（同、五二七～五二八頁）。

^{一九} 陸海軍の参加兵力・戦死者の内訳は、

	陸軍	海軍	計
参加兵力	五〇三、六〇六	一二七、三六一	六三〇、九六七
戦死者	三六九、〇二九	一〇七、七四七	四七六、七七六

（一九五七年十一月二〇日 引揚援護局調、宇都宮一九八一、一九〇頁による）

^{二〇} 「日本とアメリカの戦争はフィリピン以外のどこかで勝負が決まって、フィリピンの民衆をふたたび戦場に巻きこむようなことになって欲しくない、ということを祈るような気持ちでいました。…『フィリピンへ寄らないで、直接日本を攻撃して降伏させよう』と云った海軍の意見を、マッカーサーはローズベルト大統領に直訴までして、フィリピンに行かなければ自分の顔が立たんというので、やってきたわけですがけれども、フィリピン民衆のことを考えると、マッカーサーには帰って欲しくなかったと思うし、帰ってこなければフィリピンがあんなにひどい戦禍を受けることはなかったというように思います。ですから、そういう点では、私はフィリピンの人に最期まで申しわけなかったという気がしま

しかも日本の軍事占領は、結局、アメリカ軍の力によってのみフィリピンの解放が達成され、戦後、破壊され尽くした国土の復興がアメリカ合衆国の復興援助によってのみ可能となるという状況を創り出し、日本軍占領以前営々と積み重ねられてきたアメリカとの植民地的関係を漸次克服してきた成果をすべて無に帰してしまった。戦後は、アメリカに対する植民地的従属が一層強化され、アメリカ的生活・文化様式への同化が加速された。アメリカ依存の戦後フィリピン復興は、「アメリカ植民地下において…依然として健在だった、スペイン時代から育まれてきた植民地都市の豊穡な文化と、多国籍的な魅力に富む生活様式を完全に抹殺した。」（中野二〇〇七、一五九頁）。

中野聡の次の言葉を、筆者もまた重く受け止めたいと思う。

「その後のフィリピンの親米反共国家としての歩みが…望ましい社会変革の契機を奪い、周辺アジア諸国との連帯を阻み、さらには東アジアの急速な経済発展から取り残されることにもつながった点で、…フィリピン独立のあり方から別の^{オルタナティブ}選択肢をことごとく奪ってしまった日本占領期の意味は、いっそう重いとわなければならない。…独立後も深くアメリカに包摂された植民地空間となったフィリピン…そのような空間をつくり出したのは、私たち日本人でもあるということを忘れないでおこう。」（中野二〇〇七、一六〇頁）。

三. フィリピン徴用時の三木の活動

日本政府と軍部は、一九四一年一月一日の御前会議で対米英蘭開戦を決定し、一月八日真珠湾を空襲し、マレー半島に上陸した。一月二三日、ルソン島リングエン湾に日本軍主力部隊が上陸し、四二年一月二日マニラを占領した。三木は、この直後（一月十六日）軍の徴用（第二次）を受け、約三週間品川御殿山の岩崎別邸ですごした後、三月陸軍宣伝班員としてマニラへ赴いた。帰国は同年一二月、約一〇ヶ月のフィリピン滞在であった。この一〇ヶ月は、青年時代のドイツ・フランス留学経験にも匹敵する、それこそ哲学者としての三木の思想全体に反省を促すほどの貴重で、かつ濃密な一〇ヶ月であったと、筆者は考えている。日本のフィリピン統治の特殊性を概観した今、私たちはこのことを、おぼろげに予感することができる。

第一次徴用組もふくめ三木と徴用をともにしたメンバーには、尾崎士郎、石坂洋次郎、今日出海、火野葦平、上田広、柴田賢治郎、沢村勉、安田貞雄、向井潤吉（画家）、田中佐一郎（画家）、寺下辰夫（詩人）、永井保（漫画家）らがいた^{二一}。

同行した他の作家たちの従軍報告やそれを題材とした文学作品から共通に窺えることは、三木は彼らとは別格の扱いを受けていたらしいこと、また三木自身もそのことをかなり意識しており、三木に対する特別待遇がしばしば同時期に徴用された作家たち（とりわけ石

す。」（人見の発言、『インタビュー記録』五二二頁）。

^{二一}この時フィリピンに徴用された作家たちの手記が、文化奉公会編『大東亜戦争陸軍報道班員手記 従軍随想』（一九四三）として刊行されている。そこには尾崎士郎を筆頭に（三木清は二番目）二四人が寄稿している。三木は、これに「比島人の東洋的性格」を寄稿した。

坂洋次郎と今日出海)の心に激しい嫉妬や反感の感情を引き起こしたことであった。

三木とそれ以外の徴用作家たちとの軋轢は、しばしば文学作品の格好の題材となった。その場合、今日出海の作品のタイトル「三木清における人間の研究」が示しているように、問題の根源は三木清という人間の人格の問題として語りつがれてきた。しかし筆者は、この問題の背後には、本土の東条内閣および大本營と現地の占領指導部との間に存在したフィリピンの現状認識と占領政策をめぐる深刻な見解の相違が存在していたと考えている。徴用作家たちは、何も知らされぬまま軍内部の決して表面化させてはならない暗闘に巻き込まれたのであった。

現地軍政監部スタッフは、近い将来フィリピンの「独立」を予定して、比島行政委員会(一九四二年一月二三日発足、長官ホルヘ・バルガス)との宥和政策を追求していた。軍政監部は、この宥和政策を解説する文章を書くことができる哲学者にして政治的文筆家である三木の能力を高く評価し、本土政府に対しては、現地の宥和政策と本土政府の遂行する「大東亜共栄圏」構想との辻褄を合わせる文章の書き手として、他方、日本軍政への不信を募らせて行くフィリピン住民に対しては、日本の占領政策を現地住民の反撥を回避する形で説明する文書の書き手として、三木を政治顧問格で厚遇した様子が、様々な証言から窺われる。

本土では、久野収が描いたように、排外主義的国体論(^{みのだむねき} 蓑田胸喜、^{かのこぎかずのぶ} 鹿子木員信らの)の猖獗によって自由な言論が閉塞させられ、リベラルな思想家さえも「危険思想」の持ち主として憲兵隊の執拗な迫害にさらされていた。他方、徴用先のフィリピンでは、現場の事情を踏まえずに下される中央政府や大本營の指令や国体論の押し付けに苦慮しながら、比島行政委員会やフィリピン住民との軋轢を極力回避することに腐心する現地軍政監部の思惑があった。

薄氷を踏む思いで占領統治を進めている現地軍スタッフからすれば、本土の「常識」や国体論を居丈高にふりかざす作家たちは、招かれざる客であるという一面を持っていた。本土の「常識」を現地でそのまま宣伝されたのでは、占領政策に支障が生じる。同時に、現地で現実に行っている政策や統治の核心部分の情報や経験を与えることは、彼らが本土政府に対する「善意」の密告者という性格を帯びているだけに、慎重に待遇しなければならなかった。結局、作家たちを前線に送って、兵士達の戦いぶりを称揚する文章を書かせることが、当たり障りのない待遇であった。前線に派遣される作家たちからすれば、それが国家に対する命がけの奉仕として受け止められた。こうして「前線に出るか否か」が、徴用作家としての義務を全うしているか否かの基準とされた。このことは、彼らがマニラに滞在している間は、ろくな仕事も情報も与えられなかったことを意味する。

ところが三木の生活は全く異なっていた。三木は、重要戦力としての活躍を期待されていたようである^二。このことが、同行した作家たちには不愉快だった。「そもそも三木は自由主義者ではないか、こういう危険思想の持ち主を戦地に送り込むことさえ、いかな

^二 一九四二年八月から第二代司令官に赴任した田中静彦中将(当時)は、三木と同郷の兵庫県竜野出身であった。この点からも三木が、現地軍政の最高スタッフと深い関係を築く可能性は大きかった。

ものか」と訝っていたところ、マニラに着いて後は、あろうことか忠君愛国の自分たちよりも良い待遇を受けている、こういう徴用作家たちに共有された憤懣を石坂洋次郎は、次のように回想している。

「報道隊員の中には…前線に出た人もいるが、どこへも行かないで、軍司令官が民衆に向かって何かの布告を出すとき、その代筆をするような仕事をしていた人もいました。あの三木清君が、それをやっていたんですがね。三木君は哲学者でしょ。そういう人が代書屋みたいなことをするのは、場ちがいの感じがするだろうが、そういう感じは、ぼくらの間でも、三木君がマニラに来る前から、もうありましたよ。彼は第二次で来たでしょ。ぼくらは第一次で行った。その第一次組の中には、もう戦争気分まき込まれて、勇ましくなっているのがいましたからね。…『自由主義者を戦場に連れてくるのはどういうわけか』なんてね。まだ来ないうちから、三木君に反感をいだいている連中が少なからずいましたよ。軍としては、向こうの人間を統治して行くためには、思想的にも相当深いものを持った人間でなきゃいかん、ということで、この人選を考えたんだろうと思いますね。…あのころの軍司令官の告示などというものは、たいてい三木君が作った文章でした〔これは事実ではなかったようであるが、最初の案文を三木が執筆した可能性は排除できない―筆者〕。」（『昭和史の天皇』第十一巻、百六十一～百六十二頁、傍点は筆者）。

石坂の回想からは、三木が他の徴用作家・芸術家たちとは全く別の特命、つまり現地軍政監部の布告する文章や本土への報告書などの原案を執筆するという特命を、ひょっとしたらマニラに到着する以前から内密に受けていたかもしれないという可能性が浮かび上がる。それは、たとえあったとしても、軍の側からも三木の側からも絶対に漏らすことのできない極秘事項であったろうし、今となっては、それを確かめるすべはない。

同行作家たちの回想は、マニラ滞在中三木が同行作家たちとは明確に一線を画し、終日ホテルの自室に籠もり、異様なエネルギーで研究ないし執筆に没頭していた姿を異口同音に伝えている^{二三}。

「全集第二十巻月報」にフィリピン徴用期の三木の行動を記した佐藤勝造の「三木さんの放送原稿」という貴重なエッセイがある。佐藤はその中で、人見潤介の次のような証言

^{二三} 三木に対して反感を抱いた作家の一人である今日出海は、次のように書いている。

「彼〔三木〕の部屋を二三度訪れたが、いつも鍵がかかっている返事がなかった。彼も亦大野〔尾崎士郎〕、石渡〔石坂洋次郎〕の如く出勤免除組だったから、大体部屋にいる筈だったのに、いつも留守だった。」（今一九五〇、四二頁、傍点は筆者）。

「三木清はどこで探してくるのか、机の上に洋書を積み上げ、（比島には本屋がなかった）片っ端から読破してはノートをとっていた。三冊目のノートが今机の上に開かれています。」（同、四五頁）。

上に挙げた今日出海の文章からも、三木が一般の従軍作家とは異なる、研究的な任務を与えられていたらしいこと、同時に、その内容と目的については、同行の作家たちに秘匿しなければならなかったらしいことが、推理される。

を引用している。

「バターン戦がたけなわのころ、文士の方々、新聞社の方々、そのほか写真の方々は勿論、画家や詩人まで、バターンの戦線におもむいて戦場生活を体験されましたが、三木先生は自分からは戦線に行こうとはされませんでした。誰かが三木さんもバターンの前線に行ったらどうですかと言ったところ、三木さんは、『私は戦争にきたのではない。フィリピンの文化の研究にきたのだ。戦争などに興味はない』と言ったとか、言わないなどと論議をまきおこし、I 君^{二四}が『おれが真意をたしかめ、ことと次第によってはこらしめてやる』と、ある夜、三木さんの室のドアをノックして『あけろ』『あけろ』とどなった。先生は鍵をかたくしめて、全然取り合わないので、同君いよいよ激昂し、『この野郎、たたき切ってやる』などと叫んで、ドアをわれんばかりにたたくので、近くの室の人々が同君をなだめようとしたが駄目で、結局、長老格の尾崎士郎先生がお出ましになって一件落ち着きました。三木先生は最後までドアはあけず仕舞でした。・・・このことは報道部としても何らかのしめしをつけないければならないので、軍命令で、バターンの戦線へ二週間ほど行かせたわけです。・・・何れにしても、三木先生は個室にこもりがちで、自分が希望してどこかに行くとか、何かをするかということは、ほとんどなかったし、また、報道部の仲間のどなたとも特に親しいということもなく、ひどく孤独な存在であったように思っています。」（一九八四年一〇月二〇日付元第十四軍報道班選任将校陸軍中尉人見潤介氏の手紙）。

これは、同行作家たちの執拗な追及の果てに三木もつい節度を失って、「私は戦争にきたのではない。フィリピンの文化の研究にきたのだ」と漏らしてしまった事実を伝える貴重な証言である。と同時に、三木がフィリピン統治政策の文化的側面に関わる研究と提言を委託されていたかもしれないことをこの証言は伝えている。もちろんこうした「任務」は、同行作家たちには秘匿されている^{二五}。

一九〇四年、三木と同郷の兵庫県竜野に生まれた武内辰治は、竜野中学校を中途退学してアメリカに留学し、シカゴ大学大学院で政治学博士号を取得した後帰国して、一九三三年以降、関西学院大学で教鞭を執っていた。一九四二年一二月、比島派遣軍最高顧問村田省蔵を委員長として比島調査委員会が設置された時、村田は委員の人選を蠟山正道に委任した。その結果、蠟山を筆頭として末川博、大島正徳、東畑精一、杉村広蔵、伊藤兆司の六名の委員が任命され、各委員にはそれぞれ補助委員（六名）が配置された。リーダーの蠟山の補助委員としては、その抜群の英語力とアメリカに関する学識を高く評価された武内が抜擢された^{二六}。比島調査委員会は、四三年九月に『比島調査報告書』を極秘資料とし

^{二四} 三木と同行した徴用作家・芸術家たちの中で、イニシャルIを持つ者は、石坂洋次郎だけである。

^{二五} 『三木清全集』の編集者である榎田啓三郎は、佐藤勝造の伝えるエピソードを「著者〔三木〕が徴用された身でありながら、いかに軍部に対して毅然とした態度をとったか、また強制的に与えられた機会を利用して、いかにフィリピン文化の研究にはげんだか」（『全集第二〇巻月報』一二頁）を証言するものと理解しているが、こうした理解が戦後の三木解釈を長い間呪縛してきたのである。

^{二六} 当時の肩書きと『比島調査報告』の執筆担当は、以下の通りである。蠟山正道（元東京大学教授、代議士、第一篇「民族」、第二篇「統治」）、末川博（大阪商科大学教授、執筆せず）、大島正徳（元東京大学教授、第三篇「教育及び宗教」）、東畑精一（東京大

て比島軍政監部に提出して解散するが、それまでの約九ヶ月間、武内は通訳として、フィリピン人研究者への聞き取りやかかれらと日本人研究者との橋渡し役として活躍した。武内は、蠟山とともに帰国する直前の三木と会食したとき^{二七}の回想を次のように述べている。

「フィリピンについてから、蠟山さんは三木清をよく知っていたから、三木さんと呼んでご飯をたべました。私も三木さんの後輩ですから、ある親しさを感じてね。…それで、『三木さんあんた、ここに一年もおられて、いま、このフィリピンの状態をどう思いますか』と聞いたら、三木さんは、…フィリピンについてあんまり期待が持てるような顔をしなかった。…あの人は全体をちゃんと掴んでたわけですね。いま、この状態はね、ウェイト・アンド・シー [wait and see、ようす見] だと言う。…日本の軍政に対してフィリピン人はね、悪意はない。悪意ある奴は、出てしまってますからね。地方行ってしまったか、ゲリラになってしまっている。そして、アメリカのマッカーサーが、…『ウィー・ウィル・リターン』、『帰ってくる』と、何回も何回も短波 [放送] で、流してますもの。それが、フィリピン人の耳に入るわけ。…フィリピンとしては、まあこれ [日本の占領] は、テンポラリー [一時的] と言うかね、アメリカがまた帰ってくる…ということを信用している人のほうが多かったんじゃないですか。…それから、『独立…のみがね、フィリピン人の心を掴む唯一の空気だ』と。『これを、いつどういうかたちで与えるかということと言わない限り、フィリピン人は信用しない』と。三木さんはそう言った。『宣撫工作してみたりいろんなことをやってみてもね、この問題を抜きにしてはフィリピン人の心は掴めないよ』と。三木さんの考え方は、非常にその点ははっきりしていたね。だから、比島調査委員会の仕事そのものについて、彼の本心ではね、あまり期待していなかったんじゃないですか。それは言いませんよ。僕らは来たばかりですしね。言わんけど言外にそれはその点に気づいたね。」（『インタビュー記録』一四三～一四四頁）。

ところが、当初は軍政に対してフィリピン統治政策のための基礎資料を提供することを目的として発足した比島調査委員会ではあったが、四三年一〇月にフィリピンの独立を承認するという本土政府の決定に伴って比島調査委員会の調査目的それ自体が変更を余儀なくされてゆく。これに関する武内の感想が興味深い。

「目的が変わってきたというよりも、…運命のいたずらというかね。…独立の内容という問題を抜きにして…フィリピンに独立は与えられない。しかし、独立を与えて『対米宣戦布告をしろ』、『大東亜共栄圏に邁進しろ』、などと言ってみても、…むこうとしては…独立したあとまで、大東亜共栄圏の一環として、共同の国際政策をとらなければいかんというようなことは無理だ、そんなことは言えないというのが三木清さんの考え方で、

学教授、第四篇「経済」）、杉村広藏（元東京商科大学教授、第四篇）、伊藤兆司（九州大学教授、第四篇）。また各委員を補佐した補助委員と当時の肩書きは、上記の順に、武内辰治（関西学院大学助教授）、平田隆夫（大阪商科大学助教授）、周郷博（元東京大学助手）、林純一（元東京大学助手）、馬場啓之助（元東亜研究所所員）、福島栄二（九州大学助教授）。

^{二七} 『インタビュー記録』で武内は三木との会食の時期を「一九四三年の一月上旬」（一四二頁）と回想しているが、三木は四二年一二月には帰国しているから、会食は一二月に行われたはずである。

やはり歴史的に観察すればね、…達観してますわ。そこまで納得さすことができないという、運命。〔『比島報告書』を〕書いているときはね。それほど強く思わなかったけれどもね、やっぱりだんだん三木清の言ったああいう考え方、あれが本当であって、ある意味において我々のしている仕事は…むなしい仕事をしておった。」（同、一四五頁）。

実は、比島調査委員会の設立それ自体が、比島派遣軍最高顧問として派遣されながら、現地軍政から疎外される傾向にあった村田省蔵^{二八}が自己ならびに非軍人行政スタッフの存在理由を示すために考案した窮余の策という一面を持っていた^{二九}。しかも村田自身のフィリピン統治に関する認識は、上記の三木の認識とかなり近かった^{三〇}。比島調査委員会の活動（一九四二年一二月～四三年九月）は、三木のフィリピン滞在と入れ替わるように開

二八 村田省蔵（一八七八～一九五七）は、大阪商船社長（一九三四年）を経て、一九三九年貴族院議員に勅撰、第二次、第三次近衛内閣（四〇年七月～四一年一〇月）の通信兼鉄道省

大臣を勤めた。四二年以降陸軍南方軍政最高顧問としてフィリピンで勤務した。四三年一〇月フィリピン駐在特命全権大使に任命される。戦後、戦犯容疑者として逮捕されるが、四七年釈放され、五四年対比賠償主席として交渉に当たった人物である。

二九 一九四二年二月から四四年二月まで比島派遣軍最高顧問付公務秘書として村田の秘書を務めた秋山龍は、最高顧問の役割について次のように回想している。

「顧問とかなんとかいうのは、まったく、世間ごまかしなんだよね、…軍政というものは勝手にやっていないんだよ、…政治家とか文官の方も、いろいろ協力してもらっているんだよという、形をとるためのものですからね。あれは。」（『インタビュー記録』五六頁）。

武内は比島調査委員会設立の経緯についてこう語っている。

「村田省蔵は比島派遣軍の最高顧問だったけれども、…なんにもすることがない、…自分の存在理由というのがない、…なんのために、わしがここで顧問になってきておるのか、意味がないということで、非常に焦燥感にかられて、…委員会をつくった。…フィリピンをどういうふう将来育てるかということについて、基礎研究をする必要がある。…日本の比島派遣軍がフィリピンを統制するのに、…なにを目的にどうすべきかということを考えるのに、やっぱりフィリピンの政治なり経済なり、宗教なり教育なり民族なりの実態を知るひつようがあると。やはり事業家ですわ。軍はそれをしないからね。『第三者の学究的な立場で、そういうことのできる人を集めてくれ』と、それで蠟山さんに全権を委任されたわけですね。」（同、一三八～一三九頁）。

三〇 秋山は、村田と比島調査委員会の活動について次のように回想している。

「村田さんが、軍政の実際の実施についてですね、意見を言った…ことはぜんぜんないですね。ただ…『近く独立させるんだから、その支度をすべきだ、それが俺の仕事だ』というふうに考えておられたと思う。だから比島調査委員会なんかも、そういう含みもあってね、おおいに熱心にやられたように思うな。…村田さんも一生懸命に、比島の歴史を勉強して、私もいっしょに勉強するということがあったね。」（同、五六頁）。

「村田さんが、比島調査をして、独立準備をすべきだという…方針をもっておったわけですから。軍政には直接口をださない…けれども、独立するとなると、なにかはっきりしたものをもっていきやいかんだろう、こういうことだと思います。」（同、六二頁）。

「質問：〔比島調査委員会の〕公式の設置の趣旨は軍政に役だてるということで、一方、委員会としては、独立にも役だつという助言をしようという問題意識があったと…そういう枠組みでみておけばよいということでしょうか。秋山：まず、間違いないな。そうだと思うね。」（同、六四頁）。

始される。もし三木の滞在が、比島調査委員会の活動時期と重なっていたら、委員会メンバーとの交流を通して三木のフィリピンでの研究・調査活動は一層の深化をとげることができたはずだと、筆者は想像している。特に、三木の後輩に当たる武内は、フィリピン人研究者との交流のほとんどすべてを担当させられていた^{三一}から、武内を通してフィリピンの研究者たちと交流する機会を三木が利用しないはずはなかったと思うからである。

一方で「何故三木ばかりが厚遇されるのか」という徴用作家たちの疑惑が次第に大きくなり、他方、三木もその不可解な行動の理由を秘匿しなければならなかったという事情が重なったところで、三木清の「人間」を問題にする戦後の一連の文学作品^{三二}が成立したのではなかったのかと、筆者は推測している。

今このような観点から、今日出海「三木清における人間の研究」を読み返してみると、三木に対する反発の前提に作家たちを意味もなく徴用した陸軍報道班そのものに対する怒りが存在したことが読み取れる。

それは、第一に、「仕事らしい仕事」が与えられないことに対する怒りであった。

「報道班の編成は参謀本部の思いつきにすぎなく、…いざ部署についてみれば編成そのものが出鱈目で、また隊長や軍人が徴用員をどう使ってよいかまるで見当もつかず、…持ち扱っている始末では、〔報道班の〕本部に行っても仕事らしい仕事は与えられよう筈がなかった。」（今一九五〇、三六頁、傍点は筆者）。

第二に、報道班を仕切っていた将校たちの無能さに対する憤懣があった。

「隊長の勝沼中佐は…比島軍司令部直属の報道部を掌握し、文化工作を運営して行く人物ではなかった。先ず文化工作の何ものであるかも理解しない。隊長がこれで、幕僚たる将校がこれ亦亦召の学生崩れのような者ばかり〔東京帝大出身の望月重信や教員出身の人見潤介のことであろう〕では、占領地の文化行政などは始めから期待は出来ぬ。事実、文化行政どころか内部のつまらぬ紛糾をまとめる力もない。驚き入った部隊であった。」（同、三六～三七頁、傍点は筆者）。

前節で紹介した人見潤介の発言と比較すると、これが同じ歴史的経験を経験した者の発言であろうかと思まがうほどの落差がある。この落差は、そのまま報道班・報道部を指導する将校たちと徴用された作家たちとの経験の落差を表現している。

今日出海の作品においては、三木以外の人物は、すべて仮名である（例えば、尾崎士郎は大野四郎、石坂洋次郎は石渡陽二郎、勝屋（報道部長）は勝沼といった具合に）。マニ

^{三一} 武内の回想。

「僕は…トレーニングは外国で受けましたから、日本語よりずっと英語のほうがよくできた…そのかわり、微妙な日本語のニュアンスというものはね、僕はずっと遅れてましたよ。…日本から行って、フィリピン調査をするというけどね、行って短期の間に、フィリピンの政治外交といったものをちゃんと調べるといようなことは、簡単にできませんよ。だから…権威のあるフィリピンの学者なり研究者から、…報告をだしてもらいました。あるいは、…会合に呼んで議論するとかね。一つの会合に複数のフィリピン人を呼んで、質問をするという場合もありましたね。」（同、一四一頁）。

^{三二} 筆者が念頭に置いているのは、今日出海（一九五〇）、阿部知二の三木を取り上げた一連の作品（一九五一、一九五四、一九六三、一九七三）である。

ラ滞在中の三木のおぞましく、卑劣とさえいえる行動が執拗に描かれて行く。それは、今日出海の眼に映った三木の姿であった。それは、尾崎や石坂にも共有されたイメージであった。今、筆者にとって気になる点は、獄死した死者に鞭打ってまでも実名を挙げて告発しなければならぬほどの深い憎悪を作家の心に刻んだ本当の原因は何であったのか、ということである。それが今のいう「異常に強烈な性欲や不潔な行為を平気で人前で語る如く…微妙さが欠けて、奇怪さが目立つ」（同、四七～四九頁）という人間三木の個性に対する嫌悪に発するものならば、単純に軽蔑して無視するという選択もあり得たはずである^{三三}。どうしても書かずにはおられぬほど激しく作家を突き動かしたのは、かれらの人生を弄んだ陸軍報道部に対する言葉にならぬ怒りではなかったのか。この怒りが、同じ運命を共有しながら、徴用生活の空しさを自分たちと共有しなかった三木に対する憎悪に転移したのではなかったのかと思う。

阿部知二の戦後の一連の三木をテーマにした作品も、今日出海の短編から受けた衝撃に端を発している^{三四}。

徴用作家たちにとって陸軍宣伝班・報道部指揮の活動がいかなるものとして体験され、記憶に留められたのか、それを尾崎士郎は『人生劇場 離愁篇』「解説」（一九五四年五月執筆）は生々しく記述している。

「昭和一六年十一月、…参謀本部第八課は、秘密計画の下に、日本の文化人を徴用した。宣伝班と称する戦闘部隊に従属する一大機関をつくる目的だったらしい。その頃、ドイツに『P・K部隊』と称する宣伝中隊が出来、その活躍が伝えられたことが参謀本部を刺戟したのである。…『日本P・K部隊』が編成されたのは台北で、そのとき百人ちかい主要人員のほかに、中尉が二人〔その一人が人見〕、少尉が五人〔その一人が望月〕、下士官が十余人、これに五十人の兵隊を加えた一大集団である。…『第一、任務一、戦場における敵の戦意破碎、ならびに反乱。投降兵を誘起せしむべき対敵宣伝、及

^{三三} 清氏は、三木が彼のパトス論において「無意識」の問題を「創造的『無』」の概念として抽象的に論じるにとどまり、それを「フロイトがずばり問題にしたような性的欲動の経験的生々しさにおいては」（初稿一一九～一二〇頁）語らなかったことを批判し、また注二八において「三木のパトス論のいわば性愛欲動に対する思索的怯懦は重大な問題であって、決して個人ヒストリー的なエピソード的な問題ではない。それは、日本における哲学的思索の根深い反身体性と性的怯懦を象徴する哲学的問題性なのだ」と重要な指摘をしている。三木の「異常に熾烈な性欲」を赤裸々に描いた今日出海「三木清における人間の研究」（今一九五〇、四七～四八頁）をこの観点から新しく位置づけ直す作業は、今後の課題としたい。三木個人にとって性欲の衝動がいかに激しく、また彼が（特に中学・高校時代）いかにその問題に悩んだのかについては、室井氏（初稿二六四～二六五頁）、亀山氏（初稿二三四、二四七～二四八頁）も指摘している。

^{三四} 阿部の絶筆となった『捕囚』は、次の文章から始まる。

「戦争が終わって五年たったころ一つのふしぎな文章があらわれた。よく知られぬ小評論雑誌の片隅に匿名の筆者によって書かれたものだったが、たちまち多くの人をさわがせるという結果を生んだ。」（阿部一九七三、五頁）。

「戦争が終わって五年たったころ」、今日出海は『新潮』一九五〇年二月号に「ふしぎな文章」、つまり「三木清における人間の研究」を掲載したのだった。

び占領地民衆、民心把握、及び一般宣撫を主体とし、併せて、報道、資料の蒐集調査に任ず』そういう説明を精細に書いた文書が配布され、部署が決定したが、それが具体的に何を意味するのか誰にもわからなかった。…最初参謀本部第八課（謀略班）のつくった構想によると、この部隊は…それぞれの機能をもった人間が各班長となって人員を組織する。つまり文学者は文学者、映画人は映画人、新聞記者は新聞記者で、軍に従属する行動方針を決定するわけであるが、しかし、要員の大部分が軍人としての経験を持っていないので、現役の軍人をもって補充することになった。中尉二名と少尉五名は軍司令部や参謀部との連絡係としての任をもつものであり、兵五十名は、いうまでもなく当番兵である。ところが、その内示が現地に徹底しなかったのと、簡潔であって、不明瞭な文書に対する解釈を誤ったために、班長は各地の戦場から、命令を受けて台湾へあつまってきた中尉、少尉と…協議した結果、彼らの進言にもとづいて、組織の主体を軍人によってかためることを決意した。ある少尉のごときは、『彼等に対しては先ず第一に威力をもって臨むことが必要です、これを…気儘にさせたら容易ならぬ結果を生ずるでしょう』と行ってK中佐を唆しかけた。…このようにして第八課の構想とはまったく異なった、軍人を主体とする宣伝班が組織されたのである。それが、後になって『軍報道部』に改編されるまで収拾のつかぬ混乱と動揺をかさねた主要原因である。…石坂洋次郎が漫画のストーリーを考えることを命じられたり、その漫画を向井潤吉が担当したり、そのような絶対命令をうけて当惑しきっていたときの二人の顔は今でもあざやかに眼底にうかんでくる。第八課は能力を徴用して、これを機械的に動かすことだけしか考えなかった。能力のうしろに人間がいるということを考える必要がなかったのである。肩章のない兵隊がいかにもじめであったかということは説明の必要もあるまい。この部隊がリンガエン湾に上陸したとき、途中ですれちがった戦闘部隊の兵士たちは俘虜の一隊がやってきたと思ったそうである。」（尾崎一九五四、三二五～三二七頁）。

参謀本部第八課（謀略班）の指令に従えば、陸軍宣伝班の編制は、徴用された文化人の専門分野ごとに班を編制し、各班の班長は文化人が勤め、配属された将校たちは「軍司令部や参謀部との連絡係」、一般兵士は「当番兵」にすぎないはずであった。ところが現地に派遣された勝屋中佐と中尉、少尉たちが共謀して、参謀本部の当初の計画に反して軍人主体の宣伝班にしてしまった、そのために陸軍宣伝班の活動全体が「収拾のつかぬ混乱と動揺」に陥ってしまったし、徴用された作家・文化人たちのあるいは可能であったかもしれない有意義な活動の可能性はすべて奪われてしまったというのが、尾崎の認識である。

「歴戦の勇将ではあっても、今まで文化なぞというものには縁もゆかりもない」（同、三二六頁）連中によって自分も含め徴用された作家・文化人たちの人生が翻弄された経験として、尾崎はフィリピン徴用を受け止めている。

「昭和十六年十一月から、十七年十二月にかけて、…私は当時、自ら嘲って『風柳軒』と号していた。『風柳』は『風流』ではない、風に柳の、あの風柳である。『選ばれて徴用に任じ、誤って青春に伍す』—という私の言葉が当時の戦場生活をもっとも的確に表現している。今にして思えば、この空白の中に私の人生が埋没してゆく過程が『離愁篇』執筆の動機であったとも言えよう。」（「前書き」同書、七～八頁、傍点は筆者）。尾崎の主張にはそれなりに説得力がある。宣伝班の実質的指揮を文化人自身が担当する

ことが許されたとすれば、徴用文化人たちはそれなりにやりがいのある仕事を見出したかもしれない。しかし、フィリピン軍政期の歴史の大きな流れからすれば、徴用作家たちも東条政府・本土参謀本部と現地軍政監部とのフィリピン統治をめぐる確執と葛藤の渦に否応なく巻き込まれていた。その際、徴用された作家たちの多くは、自覚せずして本土の威光を笠に着て自己の立場を正当化する場面が多かったのだと思う。徴用作家・文化人に広く共有されていた尾崎に代表されるような空しさの体験を、フィリピン滞在中、三木だけが共有しなかった。それが、同行した徴用作家たちの幾人かには許せなかったのだと思う
三五。

四. フィリピン徴用経験を三木自身はどう語っているか。

一〇ヶ月のマニラ滞在中三木と関係した人々の証言から、三木がフィリピン文化に関する研究的な「特命」を請けて、ホテルの自室に籠もって研究とノート作り^{三六}に没頭し

三五 三木とほぼ同時期にビルマに徴用された清水幾多郎は、三木について次のように回想している。

「昭和十六年の忘年会を神田の鳥屋でやった夜、既に十一月に若干の文士達が徴用されて南方へ行ったことが話題に上り、私が『僕等も徴用されるかもしれぬ』と言ったのに対して、彼〔三木〕は『僕等を徴用したら、向こうが困るから、そんなことはあり得ない』と言っていた。併し年が改まると間もなく、その席にいた三木、中島、私〔清水幾多郎〕の三人は徴用された。三木清はフィリピン、中島健蔵はマライ、私はビルマと方面は違ったが同じ日に徴用を受けて、南海を渡って行った。彼がフィリピンで何をしたか。何を考えたか。彼は書かなかった。語らなかつた。彼ばかりではない。吾々は一様に黙っていた。…南方における彼の生活と条件とに就いては何も知らないが、ビルマにおける私自身の経験から推測して、大体的見当をつけることは出来る。」（『回想の三木清』一九四八、八二頁、傍点は筆者）。

大東亜共栄圏に組み込まれたアジア諸地域における軍政のあり方は、各地域ごとに相当の多様性を持っていたし、その中でも日本のフィリピン統治はきわめて独特な統治であった。また同じマニラに徴用された作家・文化人たちの中でも、三木と他の作家たちとの活動と経験は全く異なっていた。しかし清水幾多郎によれば、「南方」に徴用された作家・文化人の「生活と条件」はどこでも大同小異であり、マニラにおける三木の経験は「ビルマにおける私自身の経験から推測して、大体的見当をつけることは出来る」程度のものである。しかもそれらの経験について「吾々は一様に黙っていた」、つまり戦後になっても語れないか、語るに値しないか、いずれかである。清水のこうした回想は、尾崎士郎、石坂洋次郎、今日出海ら三木以外のマニラ徴用作家たちのそれと近い。戦後の三木研究が、こうした十把一絡げの戦争観・前線滞在観に呪縛され続けてきたことが、冒頭で指摘したような極めて一面的な三木像を造り出し、それを固定させてしまった。

三六 「今は紛失して見当たらないが、十冊ほどの大判のノートが残されていた」と榎田啓三郎は述べている（「全集第二〇巻月報」一二頁）。

以下は、三木と親しかった小林勇の回想である。

「品川〔岩崎小弥太郎〕にいる間〔四二年一月〕に三木さんは、自分の行く先がフィリピンであることを知った。たちまちスペイン語の勉強をはじめた。一ヶ月たって出発の頃には大体わかったといていた。徴用されてから満一年で以前と全然変わらぬ顔

たことが推測される。その合間には、軍政監部の公布する指令や本土への報告書の案文を起草した。この一〇ヶ月は、大東亜共栄圏の現実と占領統治の実際に深く関わった、三木の生涯にとって最初で最後の経験であった。それは、現地軍司令部との密接な協力と独特な信頼関係の上に行われた実践的かつ政治的な経験であった。この経験は、三木自身の世界観を変える程の意義を持ったと思われるが、一九四二年十二月マニラから帰国した三木は、それを得々と語ることは許されなかった。三木が携わった仕事は、東条内閣の進める方針と乖離する宥和主義的政策を推進する第一四軍司令部および軍政監部のフィリピン統治政策の確定に関わる機密事項であったと推定されるからである。阿部艶子のエピソードからも窺えるように、従軍作家はしばしば大本営や政府によって、現地司令部の面従腹背を探る密告者として利用されてきた。マニラで同行作家たちの反感を買ってまで秘密保持に努めた三木が、本土でフィリピンでの研究内容をそのまま公開することは厳に戒めなければならなかった。

しかし、本土とフィリピンをめぐる政府・軍内部の複雑な事情と、厳しさを増して行く国内の言論統制という二重の制約にもかかわらず、三木は、エッセイや講演の形で自らの徴用経験を、慎重に言葉を選びながら語っている^{三七}。これらの文章の中から重要と思われる論点を、以下に整理してみたい。三木が徴用以前から主張していたものと変わらない内

で帰って来た。マニラでは出来るだけ図書館で暮らしたといていた。夥しいノートを作って来た。軍人の馬鹿さ加減、不真面目さ、徴用された仲間の文士達の出鱈目さを話した。」（『回想の三木清』一九四八、一〇〇～一〇一頁、傍点は筆者）。

^{三七} フィリピン徴用中および帰国後の徴用経験に関わる諸論文・エッセイ・講演記録には、以下のものがある。

「日本の歴史的立場」一九四二年三月四日フィリピン放送局より英文で放送された講演の原稿、第二〇巻。

「アメリカ思想文化の敗北」『東京朝日新聞』一九四二年一二月八日、第一九巻。

「国民的性格の錬成」『日本文化の構想と現実』一九四三年一月、第二〇巻。

「比島人の東洋的性格」『改造』一九四三年二月（『南十字星』に一九四二年七月から十一月まで8回に渡って掲載）、第一五巻。

「南方から帰って」『一橋新聞』一九四三年二月二五日、第一五巻。

「南方の大学」『毎日新聞』一九四三年三月二、三、四日、第一五巻。

「戦争の現実と論理」『京都帝国大学新聞』一九四三年三月五日、第二〇巻。

「フィリピン」『中央公論』一九四三年三月、第一五巻。

「飛行場の埃」『比島戦記』一九四三年三月、第一九巻。

「比島の言語問題と日本語」『日本語』一九四三年五月、第一五巻。

「新しい環境に処して」『婦人公論』一九四三年五月、第一五巻。

「比島の教育」『教育』一九四三年七月、第一五巻。

「比律賓文化の性格」『国際文化』一九四三年十一月、第一五巻。

「比島人の政治的性格」自筆原稿、一九四三年十一月頃、第一五巻

「現代民族論の課題」講座『民族科学大系』一九四四年十一月、第一九巻。

容の文章も、それが太平洋戦争の最前線とフィリピン人という他者との出会いという現実的経験に裏打ちされて語られている場合には、三木の以前の諸著作とは全く異なる意義を獲得するはずである^{三八}。

(一) 戦争の現実の厳しさ

三木は、一九四三年三月一日、京都大学文化部の招待により「戦争の現実と論理 南方戦線の体験」と題する講演を行った。その要約が三月五日付の『京都帝国大学新聞』に掲載された。三木は、「南方の戦線をめぐって何よりも強く感ぜられたのは戦争というものの烈しさ、厳しさであった」という述懐から始めている。ここには、「戦争の烈しさ、厳しさ」を知らぬ者たちが、安全な場所において、戦争政策を策定していることに対する無言の激しい批判が込められている。これは、東条内閣と大本営による無謀な指令に翻弄され続けた多くの現地派遣軍指導者たちに共有された思いであった。三木は、フィリピン戦線の体験を経て初めて、前線の厳しい現実から出発する理論と哲学を構想し始めている。

「近代戦は確かに思想、文化、武力、経済等の総合戦であろうが、ただかくいわれる言葉には武力戦の厳しさを逃避する現代のインテリの甘さや観念的な思想が窺わ

れるのである。しかし戦争の決定力はいくまで武力であって、戦争の本質は武力戦の厳しさにあるというべきであろう。」(二〇巻、二五四頁)。

近代戦は、武力戦だけではなく、総力戦だという連中に限って、「戦争の本質」が「武力戦の厳しさ」にあることを何も分かっていない連中だ。

^{三八} 清氏は、第一部第一章において「その人間の負う歴史的来歴によって、またその人間の位置する歴史的局面によって、その問題化の深刻性において《自己固有の他者》と呼ぶべき特別な存在が運命的な権威を持って選び出される」(初稿一三頁)と述べているが、近現代の日本人にとってアジアの諸民族こそそのような《自己固有の他者》(少なくともその重要な一人)ではなかったのかと、筆者は考えている。その際、戦争体験の語りに典型的に見られるように、直視するには余りにも苛烈な体験はかえって封印され、体験者個人によって公開的に「問題化」されることが少ない。人々は、もう少し痛みの少ない体験を核として自分史をまとめ上げようと(しばしば意識することなく)努力する。《自己固有の他者》をめぐる問題にも、本当に「運命的な権威」を持つ《自己固有の他者》が「問題化」の主題として「選び出される」のかというデリケートな問題が存在する。近代日本の歴史は、一九四五年までは、琉球、北海道、樺太、朝鮮半島、台湾、満州を始めとして植民地の拡大と経営を伴った歴史であった。これを裏から見れば、集団的には支配者、侵略者、加害者という資格の限界を持ったとはいえ、日本人はアジア諸地域の歴大な人々と日常生活において対人的に交際した経験を持っていた。それは、日本の生活様式や文化の一方的な押し付けにとどまらず、他者であるアジアの人々から異質なものを学習する経験でもあったはずである。戦後日本は、戦争責任の痛切な自覚と平和憲法の擁護とひきかえに、日本列島に閉塞し、日本人以外の人々と日常生活レベルで交際する機会と環境を喪失していったのではないだろうか。そこから、平和を希求するが、日本の外部世界で生きている他者を知らない戦後の日本人が生まれた。筆者もその一人である。一九四二年以前の三木も、二〇代のドイツ・フランス留学以外には、基本的に日本本土に留まって執筆活動を続けてきた。その間、短期の満州、中国への講演旅行を三度行っているが、それは三木の思想を揺るがすほどの意味を持ったとは思われない。しかしフィリピン徴用以降、フィリピンは三木にとって「運命的な権威を持って選び出され」た《自己固有の他者》となったと筆者は考える。

三木が「武力戦の厳しさを逃避する」哲学として、観念論的弁証法を名指しで批判している。

「戦争の厳しい現実性はこれまでの観念論的な弁証法に対して新しき解釈を与えんとするのである。…なるほど過去の歴史には対立の総合を考え得るであろうが、現在の対立が如何に総合されるか考えることは出来ない。現実の対立には妥協はない、未来はキエルケゴールのいうごとく絶対的断絶と考えるほかない。…かかる状態はこれまでのごとく対立の総合を以てしては把握できず、ここにおいて新しき論理が考えられねばならぬ。」（同、二五五頁、傍点は筆者）。

ここで三木は、(a)理論的対立は、理論的に総合することができるが、現実的対立は、理論的に総合することができないこと、(b)現実的対立の中から何が総合されて出てくるかを決定するのは、実践であること、(c)あくまでも実践を通して打開されるべき対立の総合を、概念の操作によって実践に先回りして決定してしまうことが「観念論的な弁証法」の特徴である。この「観念論的な弁証法」は、自らは厳しい現場の第一戦に立たず、遙か後方の安全な地点に立って、現場に指令を発する者の立場である。

(二) 実証的精神と「後方の観念論批判」

一九四三年二月、三木は『一橋新聞』に「南方から帰って」という短いエッセイを寄稿する。このエッセイの中にも、三木が到達した新しい境地が簡潔に語られている。

「私が南方において特に必要を感じたというのは実証的知識である。何をやるにしても、実地の調査と研究に基く知識が必要なのである。…すべての実践は実証的知識を基礎としなければならぬ。」（「南方から帰って」十五巻、五二二頁）。

一〇代から文学と宗教文献を耽読し、大学入学時にはすでに哲学者として身を立てることを決意して以降、およそ「実地の調査と研究」など行ったことがなく、またその必要性を深く感得することもなかった三木が、「南方」の経験を踏まえて、今、「実地の調査と研究に基く知識」が必要であるとの認識に想到し、「すべての実践は実証的知識を基礎としなければならぬ」と主張するまでに成長しているのだ。三木の言う「新しい論理」は、もはや『構想力の論理』の三木ではない。おそらく三木は、これまでの自己の哲学の本質的部分さえ放擲し、再構築というよりは、むしろ新構築といった方がふさわしい論理を模索し始めている。しかも「すべての実践は実証的知識を基礎としなければならぬ」という規範を徹底するならば「哲学者」という肩書きさえも投げ捨てて「実地の調査と研究」に進むことさえ考えていたのだと考える。戦時下の厳しい言論規制と三木自身の不幸な獄死によって、この「新しい論理」の理論化は着手されずに終わった。しかし、だからこそフィリピンから帰国後の三木のわずかな発言と文章を細心の注意力を持って深く読み込むことが、今絶対に必要なのだ。少なくとも、生涯の最終局面において、『構想力の論理』にも、『親鸞』にも書かれていない「新しい論理」を三木が構想しつつあったという事実だけは確認する必要がある。

この「新しい論理」が、単なる既成の哲学諸潮流間の単なる宗旨替え（例えば、実証主義への転向）に留まらないことは、これが常に、「後方の観念論」批判とワン・セットになって主張されていることから読み取ることができる。つまり、実証主義や唯物論も含め

「後方」で思索される哲学はすべて「後方の観念論」に他ならない。「新しい論理」の譲ることのできない原点は、「前線」の論理であること、それは、当時の三木にとっては、武力戦の厳しい現実を直視し、そこからすべての思索を容赦なく再吟味することであった。三木は、「近代戦とは、武力戦だけではなく、総力戦である」という一見して自明な命題さえも、「後方の観念論」として批判しようとしている。ここで三木が問題にしていることは、厳密な概念の定義や定式化といった正確な言語表現の問題ではなく、言語の迫真性の次元の問題、つまり言語を語る者が、厳しく危険な現実の現場に実際に身をおいて、その経験をいわば担保にして発言しているのか、それとも自ら経験しなくても推論と想像力を通して獲得された思想を巧みなレトリックを駆使して文章化しているだけなのかという問題である^{三九}。フィリピンに徴用される前の三木の評論には、多分に、後者の傾向があっ

^{三九} 三木は「解釈学と修辞学」（一九三八年）において、すでに次のように述べていた。

「論理的思考が对象的に限定された思考であるに反して、修辞学的思考は主体的に限定された思考である。前者が真理性（Wahrheit）に関わるに反して、後者は真実性（Wahrhaftigkeit）に関わる。」（五、一四八頁）。

その意味では、ここで筆者が述べていることも、論理的思考に対する修辞学的思考の問題、言語の「真理性」に対する「真実性」の問題という理論的枠組みの中に収めることができる。「解釈学と修辞学」において構想していた「修辞学の論理」は、例えば次のような認識を前提としていた。

「我々は自分の理由によって他の者を屈服させることができるにしても、彼自身の理由によってのほか他の者を心服させることができない。従って修辞学は相手の人間の心理や性格を考慮し、彼らがそこに彼等自身の理由を見出すようにしなければならぬ。そして我々の真実性のみが彼等の真実性を喚び起し得るであろう。」（同、一五三頁、傍点は筆者）。

ところが三木はフィリピンにおいて、戦争と軍政の状況下においては、我々（統治者＝日本人）の側の「真実性のみ」では彼等（非統治者＝フィリピン人）の内面の「真実性」を喚び起こすことができないという厳しい現実と直面した。そもそも異なる言語間のコミュニケーションにおいて「行為の立場に立つ」修辞学が、どれほど困難な課題と問題と直面するものであるのか、フィリピン徴用以前の三木は真剣に考えたことがなかった。

「人間は言葉と共に社会から、しかも独立のものとして生まれるのである。…言葉は人間存在の社会性の基礎であると共にその個人性の基礎である。私は汝に対して語り、汝に対して自己を表現するのであり、汝は私に対して表現的なものである。」（同、一五六頁）。

三木は、自らの「根本に於いて構想力の論理でなければならぬ」（同、一五一頁）修辞学の論理もまた、「前線」（つまり日本人が統治者の立場で他者であるアジアの諸民族と社会的、倫理的に関係する現場）の厳しさを踏まえない「後方の観念論」であることに気がつく。

「私がおの人に話しかけて話す相手が言葉のテロス（目的）である。言葉のテロスは私ではなく、却って聴き手即ち汝である。」（同、一四五頁）。

三木の優れている点は、「言葉のテロス」は「聴き手」つまりフィリピン人であるという論理を推し進めて、フィリピンの貧しい農民たちの生業と生活を向上させることができなければ日本がフィリピンを統治する資格がないという立場から、フィリピン滞在中にフィリピン農業に関する研究に没頭したことである。後述するように、日本の文化をフィリピンに普及する活動は「産業の線に沿って」行わなければならないと確信するに至った三木は、他者であるアジアの民衆との関係においては、自分の構想力および修辞学の論理がほとんど通用しないことを自覚して、それを打開する方向を模索し始めたのだと考える。

た。

「ところが従来日本の学問にはかような実証的研究をとかく軽視するという傾向があったのではなかろうか。…科学性というものは実証性と論理性の統一として成立するのである。ところが現在では、学問においてかような科学性よりも思想性が問題にされている。…しかしながら、ただ思想性だけを問題にして科学性を問題にせず、特に実証性を無視するということは、これも前線の現実と一致しない『後方の観念論』というものである。…日本が当面している厳しい現実、甘い観念論、浪漫的な形而上学で乗り切れるものではないのである。ところが近来かような観念論的形而上学的傾向が著しく濃厚であるのは、反省を要する。…ところで思想と実行が一致しないという場合、…その思想にも何か欠陥があるのではないかどうか、反省の要があるのである。つまりその思想があまりに観念的であって、現実を処理するに役立たないというようなことがあるのではないか。即ちこの場合にも思想の実証性が問題である。…あらゆる種類の『後方の観念論』を克服しなければならぬ。」(同、十五卷、五二二～五二三頁、傍点は筆者)。

三木は、南方から帰って初めて、日本が必要としている実証的精神が「前線」つまり戦争の現場に存在していることを知った。他方、「現実を処理するに役立たない」観念論は、「後方」に存在していた。「後方」とは本土であった。本土を我が物顔に闊歩している「思想」は、「思想性だけを問題にして科学性を問題にせず」、「日本が当面している厳しい現実」を「甘い観念論、浪漫的な形而上学で乗り切ろうとしている体のものであった。

本稿の読者は、ここで「その思想があまりに観念的であって、現実を処理するに役立たない」思想とは大東亜共栄圏と国体思想それ自体であることを容易に理解できるであろう。

三木は、フィリピン徴用以前から、排外主義的な国体思想を巧みに批判し続けてきた。それは、一見、アジアの盟主たらしとする日本の軍部の戦略を受容するポーズを取りながら、それを逆手に取る形で国体思想や日本中心主義の一面性を批判するというレトリックをとった。治安維持法違反の咎を受けることを回避しつつ、いわば獅子身中の虫となって日本の中国・アジア侵略を批判する戦略は、簗田胸喜ら国体論者たちを苛立たせたものの、三木が頼みとした昭和研究会も一九四〇年一月解散に追い込まれ、それ以降は、いかなる抵抗も不可能となったように見えた。しかし、絶望的局面の打開は思わぬ方向から訪れた。フィリピンに滞在した一〇ヶ月間、三木は、本土政府と海外の軍統治指導部の間に大きな矛盾の存在することを経験し、同時期に徴用された作家たちとは違って、現地軍政監部の政策立案にも深く関わる経験を持つことができた。

「現実を処理するに役立たない」観念論を批判し、「思想の実証性」を問題にすることは、理論上は、本土にいても行うことができる。しかしその場合、「思想の実証性」という理念は具体的経験による裏付けを欠いているから、それ自身が「後方の観念論」の一形態にすぎない^{四〇}。しかし三木は、いま、一〇ヶ月のフィリピン経験を踏まえてはじめて「思

後述する「客観的に物を造る立場」の提起はその模索の中で登場した構想であったと考えたい。

三木における修辞学と「真実性」の問題については、亀山氏も重視している(初稿二一六頁)。

^{四〇} 筆者は、この「後方の観念論」批判を三木自身の従来理論への自己批判としても

想の実証性」を主張することができるのである。厳しい検閲の下で語ることのできる言葉はあまりにも乏しかったが、それでも一見抽象的に語られる文章の背後には、フィリピンでの具体的経験が充満している。

(三) 思想を論理化することの重要性

「すべての観念論はけっきょく自己満足もしくは自己陶醉にすぎない。…今度南方の宣伝戦あるいは思想戦に従事した、責任感のある者の誰もが切実に感じたのは表現の問題、つまりどのように表わせば日本の思想を敵にあるいは現住民にわからせることができるかということであった。これは単に語学の問題でなく、また実に論理の問題である。…日本精神といい日本の世界観というものは、日本人同士の間なら、論理を介しなくても、感情だけでわかるかも知れない。しかし前線において異民族を相手にして、敵の思想を撃破して日本の思想を浸透させるためには、論理がなければならぬ。論理を無視することがあたかも日本的であるかの如き議論は、これも前線の現実を考えない『後方の観念論』である。」（「南方から帰って」同、五二一～五二二頁）。

昭和研究会に参加して東亜共同体構想にコミットしていた当時から、三木は、日本が東亜において指導的役割を果たそうとするのであれば、その指導理念は日本以外の東亜の諸民族にも通用する普遍性を持たなければならないという主張を展開していた^{四一}。しかしフ

理解すべきであると考え。三木の思想構造それ自身の中に、重大な盲点や思想を「空転」させる構造が内在していたことは、清、津田、亀山三氏も強調している。この問題を最も総括的に展開しているものが、清の「三木パトス論の問題構造」である。

「哲学こそは…或る絶対者の原理から出発して、世界と人間とのあいだに張り渡された《存在》と《意味》との究極の統合を…果たす絶対者の側から『真理』を教え述べるという立場をとらねばならない、かかる強迫観念が三木をまだなお捕縛している。この強迫観念が、彼の思考を…形式的なものにしてしまい、矛盾的契機^{オブセッション}の『弁証法的統一』なる論理をいわば結論先取的に、一種の論理的予定調和主義として言挙げさせてしまう。だが、このことこそが『具体的哲学』たらんとする彼の抱負の挫折を産み出すのだ。」（初稿一一八頁）。

その結果、三木は「『社会』と個人とのさまざまな矛盾に満ちた諸関係を一日一步解明し批判する」努力をせず、創造的行為を惰性化・制度化させ、惰性力に変質させる疎外や物化の問題を主題化することができず、「個人と社会、個人と自然…等々を媒介する媒介項の究明に向かう執着心というものが消えてしまう」（初稿一三五頁）。

このような三木の思想に内在する弱点に関する認識は、表現に多少の力点の違いはあるとはいえ、亀山、津田両氏も共有している。筆者は、上記の論点を、哲学が哲学固有の次元にとどまり続けるかぎり、具体的現実の思考たりえないことを示すものと理解たい。この脈絡において、三木において「日本の現実から出発した固有の『問題』を新たに見だし、その『問題』に即して考え抜くことから自前の、もはや『哲学』でない哲学を形成することが課題」（初稿八四頁、傍点は筆者）となったという津田氏の指摘は重要である。実証的調査研究というべき営みに没頭したフィリピンでの三木の研究活動を振り返る時、「もはや『哲学』でない哲学を形成することが課題」となったことの重さが、より浮き彫りになってくるように思うからである。

^{四一} 「日本文化の特殊性をただ強調するのみでは日本の行動の基礎は決して与へられない。日本固有のものを支那人に強要することは全く無意味であり、不可能である。東洋といふ

フィリピンで三木が目撃した現実、はるかに深刻な事態であった。現地の陸軍報道部は、大東亜共栄圏構想や日本精神をフィリピン人たちに宣伝することを事実上放棄せざるをえなかった。それは、現地部隊の怠慢ではなく、普及すべき日本精神や日本文化なるものがそもそも日本語以外の言語を母語とする人々には理解不能であるのみならず、現地で通訳に当たっているスタッフ自身にとってさえ理解不能な事柄であった。三木は、思想が翻訳可能となり、異文化の他者に理解可能となるためには、その思想がまずもって十分論理化されなければならぬことを痛感した。

この経験は、おそらく、三木自身の哲学に対しても厳しい自己批判を迫るものであったであろう。というのも三木の哲学は、本質的に、ロゴスに対してパトスの意義を強調する哲学であったし、ロゴスの立場を乗り越える哲学を三木は追究してきたからである。

現地調査を重視する実践的実証的精神と思想の論理化の要求、この二つは、フィリピン経験を経て三木が新しく獲得した立場であり、三木の思想にとって新しい局面の始まりを告げるものだった。

(四) 外国語コミュニケーション能力の重要性と通訳の役割

米軍およびフィリピンの政府要人と交渉する必要性もあって、第一四軍軍政監部には軍部のみならず各省から、語学に堪能で国際経験の豊富なスタッフが少なからず派遣された。彼らは三木も含め徴用作家・文化人たちよりもはるかに詳しくアメリカの国力、文化、思考様式、植民地政策、軍事戦略などに通じていた。三木はフィリピンに来て初めて日本の総力戦や大東亜共栄圏に関する水準の高い議論に触れる機会を持ったのではないだろうか。占領政策を策定するためには、英語、スペイン語の文献の渉猟・検討が不可欠であったし、現地の民衆に政策を伝達するためにはタガログ語その他の諸言語に通じている必要があった。第二節で見たように、現地軍政スタッフは、本土から派遣された政府・軍の要人や作家たち向けに日本語で話す内容と、通訳を介して現地フィリピン人に英語、スペイン語ないしタガログ語で伝える内容とを巧みに使い分けるといった戦術も意識的に採用した。

通訳は、今日の国際会議などにおける通訳の仕事をはるかに超えて、日本人とフィリピン人ないしアメリカ人との間の意思疎通を媒介する不可欠の存在であった。この意思疎通のあり方は、誰の立場に立って通訳を行ったのかという通訳者自身の政治的意志に大きく左右された。その意味で通訳は、単なる通訳ではなく、実質的に異言語間の交渉をリードする影の実力者でもありえた。その経験を、三木は次のように語っている。

「フィリピンでは英語だけでは十分ではないが少なくとも英語ができなければ第一線の仕事はできない。現に、あちらで第一線に立って最もめざましく活動している人のひとは、アメリカで幼稚園から大学までやったという人である。この人は、フィリピン人も、アメリカ人よりも英語がうまいと感心しているほど英語に堪能であるがそれでいて日本精神というものもしっかりと掴んでいるのである。初めは単なる通訳

ものを考えずして、日本と支那とが真底から結びつくことはあり得ない。」(三木清「支那事変の世界史的意義」昭和研究会報告、一九三八年七月七日、全集未掲載、『批評空間』II-19、一九八八年、三五頁に掲載)。

のように見えたが、その人がいつのまにか本尊と見えるようになり、本尊はかえって影が薄れるという有様であった。」（「南方から帰って」一五巻、五二〇頁、傍点は筆者）。

三木がここで「第一線に立って最もめざましく活動している人」とは、浜本正勝である。浜本は、一九〇五年ハワイ移民の子として北海道で生まれたが、幼少よりハワイ・オアフ島で育ち、一九二七年ハーバード大学法学部（国際公法専攻）を卒業後、帰国した。開戦当時はGM極東地区総支配人であった。

浜本は、開戦直後に「第一戦に出す」という条件で「陸軍省兵務課に志願届け」を出し、四二年七月に少佐待遇でマニラに着任した（『インタビュー記録』七七頁）。浜本は志願の理由を、「私は必ず日本の軍政はまずいことになると思っていましたから、それを少しでもよくしようという意図があったので、第一線にこだわった」（同、八三頁）と回想している。マニラ着任後、自ら志願して数ヶ月捕虜収容所所長となったが、この収容所には「鉄条網も鉄線もなかった」にもかかわらず、「この収容所からは、最後の日まで…脱走者はなかった」（同七九頁）という。

陸軍報道部に徴用された作家たちとの交流について彼は、次のように述べている。

「そのころ、マニラには軍の報道部があって、そこから日本の著名な文士が収容所に送り込まれてきて、みなさんの洗脳的な講演があるわけだ。大東亜精神とか八紘一宇とかね。それで、火野葦兵さんらが来て、朝まで二人で呑んで、肝心の講演ができなくて私が代理でやったこともあった。…『青い山脈』の石坂洋次郎が来て、あの人は喋るのが得意ではなかったので、『キセルで行きましょう』と行って、最初と最後だけ石坂さんがやって、途中は私がやる始末」（同八〇頁）。

浜本が三木と初めて出会ったのは、おそらく、四二年九月報道部主催の「日比文化人シンポジウム」の通訳を浜本が務めた時であった。「朝から晩まで日比双方の通訳」を一人でこなしていた彼が、「その日の午後遅く」三木の通訳をする段になって「あるハプニングが起きた」。

「発言者は三木清さんで西田哲学の講義をやり、私が通訳した。会議室が突然シーンとしてきた。『あれ、おかしいな』と思ったら、私は、三木清さんの日本語の発言を日本語で言い直しているんだね。それで、あわてて英語で言い直した。そうしたら『人生劇場』の尾崎士郎が私の所に来て『わしは三木の哲学が、君の解釈ではじめてわかったよ』と三木さんの前と言うんだよ。」（同八一頁）。

先に紹介した三木の文中に登場する「初めは単なる通訳のように見えたが、その人がいつのまにか本尊と見えるようになり、本尊はかえって影が薄れるという有様」という章句の背景の一つとして、この時の三木自身の経験も含まれていたのかもしれない。

浜本は「日本語から英語と英語から日本語を、間一髪休みなく単独で通訳する任務」（同八一頁）をこなすことのできる唯一のスタッフとして、フィリピン、日本双方の政府要人の篤い信頼を受けた。一九四三年一〇月ラウレル大統領を首班とする共和国が成立すると、ラウレルの要請によって大統領特別顧問（閣僚待遇）に任命され、ラウレル大統領の文字通り右腕として大東亜共栄圏内部におけるフィリピンの独立の実質化のために努力した^{四二}。

^{四二}浜本は、四三年十一月東京で開催された大東亜会議においても主席通訳を務めた。ま

フィリピン戦局の悪化に伴い、四五年三月、ラウレル大統領は日本に亡命する。その際、大統領は浜本にも同行を要請し、日本政府も「ラウレル大統領に同行すべし」という特別命令をだしたが、浜本はこれを拒否した。大統領は「日本に行ってもおまえがおらんと、わしは…なにをしていいかわからんのだ。なぜだ。」と浜本をはじめて本気で叱ったという（同、一一二頁）。

「これは最後の飛行機だからね。村田さん〔村田省蔵、四三年一〇月以降は駐比特命全権大使〕は、『日本へ帰れる帰れないは、これできまるんですよ』と言い、私〔浜本〕は『結構です』と言いました。」（同、一一三頁）。

浜本がフィリピンに敢えて残留した理由は、フィリピンに残る共和国政府の閣僚たち全員を無事アメリカ軍の側に逃がすためであった。アメリカ軍側に行くためには日本軍の占領地域を通過しなければならなかった。そのためには山下奉文司令官の特別通行証を提示する必要があった。浜本は、その特別通行証を配るために自分だけが知っていたバギオ山中の閣僚たちの隠れ家を一軒一軒訪ね歩いた（同、一一三頁）。その結果、浜本自身も「極度の栄養失調とアメーバ赤痢の合併症で、四〇度近い高熱で毎日苦し」み、山中を「よつんばい」で歩みつつ生還したのであった（同、一一四～一二二頁）。

このような経歴をふまえるならば、浜本の『インタビュー記録』での以下の発言も、それなりの重みを持って受け止めることができよう。

「私ははじめから、この戦争は負けるとわかった。アメリカでの生活や米国出張のとき、GMの工場を見てそう感じた。…大東亜共栄圏の理念も、戦争が起こる前からうたっておいたら、今度の戦争はなかったんじゃないですか。最後に、なにか大義名分を広めなければならんというので大東亜共栄圏を持ち出す。それも…言い出したもの〔日本〕のプロスペリティであって、それ以外のなものでもない…。あの戦争は、明らかに侵略戦争ですよ。…〔フィリピンでの自分の活動の位置についての質問に対して〕勝つためでもない。…私は少なくともフィリピン人のためになると、それに徹したと思います。日本が犠牲になっても、軍が犠牲になってもね。だから、西村少将〔西村敏雄、四四年九月～一二月第一四軍参謀副長〕の部下がピストルを持って私を脅したんでしょう。」（同、一三一頁）。

（五）三木の実証的研究の内容

マニラで三木が行った実証的研究は、全集一五巻所収の「比島人の東洋的性格」、「フィリピン」、「比島の言語問題と日本語」、「比島の教育」、「比律賓文化の性格」、「比島人の政治的性格」、「南方の大学」などの諸論文の形で発表された。しかし三木が

た四五年マニラでの山下奉文裁判の特別弁護人、四六年東京裁判においては清瀬一郎事務所勤務して、いわゆるA級戦犯の弁護側スタッフとして働いた。「東京裁判の清瀬法律事務所から法廷に出された英文」は、浜本が書いた（同、一二七頁）。

フィリピンで行った研究ないし読書は、これらの時局評論で紹介されたものよりもはるかに広範な内容を持つことは疑いない。しかし、極めて限られた時局評論の形で公表された諸論文だけからでも、三木が調査・研究したテーマ、領域が極めて多岐にわたっていることがわかる。マニラ滞在当時の三木は、職業的哲学者としての肩書きを返上して、その研究時間の大半をフィリピンの政治、教育、言語、民族特性、農業経済および農業技術などの調査・研究に充てたのである。この意味で、三木の仕事は、三木と丁度入れ替わりに組織され、活動を開始した比島調査委員会の先駆けという意味を持っていた。

前述したように一九四三年九月極秘資料として軍政監部に提出された『比島調査報告』は「第一篇 民族」、「第二篇 統治」、「第三篇 教育及び宗教」、「第四篇 経済」からなっていたが、三木の諸論文は内容的にそれら全てに渡っている。比島調査委員会を企画し設立した村田省蔵（比島派遣軍最高顧問）は三木と同月（四二年二月）マニラに着任した。それから蠟山正道の協力を得て委員六名、補助委員六名からなる比島調査委員会を一二月に設立するまでの期間、村田と三木との交流を示す証言、資料の類は全く残されていない。証言としては、三木と同郷の後輩武内が、比島調査委員会のメンバーとして着任した直後、蠟山の紹介で帰国直前の三木と食事を共にしたことが、委員会と三木を結ぶ唯一の証言である。

三木が、比較文化、比較言語、民族問題、政治、教育などのテーマに興味を抱き、それらに関する諸文献を渉猟したことは、それ以前の三木の時局評論家としての経歴からも十分理解できる。しかしフィリピンに関する三木の評論がそれ以前の本土におけるそれと大きく異なる点は、農業問題に関する記述の多さとその重要性に関する認識である。フィリピンに徴用されたのだから、フィリピン農業に関心を持つのは当然だろうと考える人もいるかもしれない。しかし、三木以外の徴用作家・文化人たちは、小説家は従軍経験を題材にした小説や紀行文を著し、画家は挿絵などを描くといった具合に、本土からもちこんだ守備範囲の枠内でそれぞれ活動していた。三木だけが、日本のフィリピン統治の現実をスペイン、アメリカによる統治と比較しつつ全体的かつ冷静に分析し、日本の軍政の限界とフィリピンの独立を志向する方向へと研究を通して歩んでいった。

以下に重要と思われる文章を、いくつか紹介してみたい。

「私がマニラに居った時分、ある有力な方面で同じ問題が提出されたことがある。『スペインはフィリッピンに教会を与え、アメリカは学校を与えたが、日本は何を与ふべきであるか。』と。そのとき殆ど一致した答は『精神』ということであった。この答は全く正しいと思う。日本はフィリッピン人に精神を与えなければならぬ。西洋文化、特にアメリカ文化に心酔して自分を忘れていた彼等に東洋人としての自覚を持たせ、日本の精神文化によって彼等を指導してゆくということは根本的に大切である。ただ、彼等に精神を与えるにしても、そこに何か現実的な条件が存在しなければならぬ。…フィリッピン人口の多数である農民の生活を向上させ、彼等に希望を与えることは、民衆の心を把握する上に最も重要なことでなければならぬ。かくして私は右の間に対して『精神』と答えることと少しも矛盾しないで、より具体的に、日本がフィリッピンに与ふべきものは『農業』であると答えたい。」（「フィリッピン」一五、五四一頁）。

重要なことは、三木一流のレトリックを駆使しつつ、「精神を与えることは重要だけれど、農業を与えることができなければ精神も与えられない」という結論を導き出している

点である。こうして三木は、フィリピンの農業の改善と農民の生活向上に関するテーマに深く入り込んで行く。

「フィリピンにおける軍政の開始と共に掲げられたのは『農業立国』の旗幟であった。…フィリピンにおける農業の発達にとって障碍になっている土地制度や小作制度の改善もやがて必要であろう。同じように農民の負債整理、自作農の創設等の問題も起こってくるであろう。…この国には工業が殆どなく、生活必需品は零細なものに至るまでアメリカその他からの輸入に仰ぎ、これに掛けられる税が政府の主要な財源であるというような有様であった。そこで今日諸般の事情から考えて差当たり必要なのは家内工業を起こすことである。フィリピン人はいったいに手先が器用で、家内工業には適している。…家内工業の奨励はそれだけ農民の収入を増加させ、彼等の生活を豊かにすることになる。」(同、一五、五四二頁、傍点は筆者)。

「文化と生活とを分離して考える古い文化主義を…脱却して文化を根本的に生活文化として考えるならば、日本の農業技術をフィリピンに与えることはそれ自身すでに立派な文化工作である。そこに新しい農業文化、新しい農民文化、新しい農民精神が生まれてくるであろう。…日本の文化をフィリピンに普及するにも産業の線に沿うてゆかねばならないのであって、農業はかような文化工作の大きな線である。」(同、一五、五四三頁、傍点は筆者)。

大東亜共栄圏の「理想」や日本文化の普及・教育などの「文化工作」は、「産業の線に沿って」行われるべきである、つまりフィリピンの主産業である農業をはじめとする各種産業の振興と人口の大部分を占める農民たちの生活の安定と向上を実現する政策を実行することこそ、日本のフィリピン統治の最重要課題であり、これの見通しが立たないかぎり、日本はフィリピンを統治する資格がない、三木は戦時下の厳しい言論統制下の中でも、それなりに主張すべき点は主張していた。

(六) 帰国後の三木清

帰国(四二年一二月)後、三木の執筆の機会は、『構想力の論理』の続編とフィリピンに関する諸評論を除けば、極端に少なくなっていく。全集第一九巻には、掲載の機会を与えられなかった三木の時局論文の草稿が四篇収録されている。これらは、はじめから公表を断念して書いた自分用のメモではなく、機会され与えられれば公表されることを予定して執筆された文章である。検閲を意識し慎重に言葉を選びつつ、しかし卓抜なレトリックを駆使して、自分の主張を注意深い読者には理解させる文体で書かれている^{四三}。

^{四三} 遺稿『親鸞』も「困難な中ででの公刊を前提しており」、「ファシズム下の“閉塞状況”…に即応した不屈の社会批判の試み」として理解すべきであることを指摘しつつ、亀山氏は、戦後『親鸞』研究の盲点について(自己批判の意味もこめつつ)次のような重要な指摘を行っている。

「戦後、三木の獄死後に『親鸞』を見た服部以後の論者たち(私も含めて)は、それが遺稿とされたことに“迷わされて”短絡的思いこみをしてしまった面があるように思う。つまり、筆を折られた三木が、死の予感の中で、“遺書”として密かに、それゆえ国家権力への斟酌なしに、自己の真情を全面的に吐露したものに違いない、と。」(初稿二一五～二一六頁)。

四四年に執筆されたと推定される自筆原稿「政治の秩序と文化」において三木は、現在の独裁的政治秩序に安易に追従することによって精神の安定と秩序を得ることに汲々としている知識人たちを「混乱に倦み疲れた文化人」と規定し、彼等を痛烈に批判しつつ、政治に対する文化の自立性を保持することの必要性を次のように主張している。

「現代文化の混乱は政治—すべて今日における独裁の形態を指す—によって…のみ救われ得ると考える者も多い。…彼等は哲学的には護教家にならねばならないし、作家としては少なくとも同伴作家にならなければならない。…彼等は…独裁によって強行される秩序の強化に奉仕する。彼等の奉仕的な地位は彼等にとっては苦痛にならない。なぜならそれによって彼等の精神のうちに、…ともかく一定の秩序がもたらされるからである。…現代の精神と文化との混乱に対して、これはまたなんと簡明な解決法であるだろう。それはまことに簡便である故、混乱に倦み疲れた文化人によって意識的無意識的に採用されることが多いのである。…文化の秩序が…外部から政治的強制的に設定されようとする場合、…文化は破壊されてしまうことになる。政治が独裁的に設定する秩序に追随することは文化にとっては甚だ危険であると云わねばならぬ。その場合むしろ混乱のうちに留まることが文化的には一層意義があるとさえ云えるであろう。今日のインテリゲンチヤは文化の秩序を政治から与えられるのほかないほど、精神的に衰弱しているのであるか。…現在の危険は、文化の内に秩序が生じたと思われるとき、同時に文化が政治に屈服してしまっていることである。文化は自己自身によって自己に秩序を与えることを通じて政治に対しても秩序を与えるように努力すべきであろう。…政治の秩序と文化の秩序との一致が究極の目標である。しかしそれは文化にとって外部から強制的に設定される秩序に隷属することであってはならないということに注意しなければならぬ。」（「政治の秩序と文化」一九、八二八～八三一頁）。

「文化は自己自身によって自己に秩序を与えることを通じて政治に対しても秩序を与えるように努力すべき」であるが、それが不可能である場合には、「むしろ混乱のうちに留まることが文化的には一層意義がある」、なぜなら「文化が政治に屈服」する時「文化は破壊されてしまう」からだ。三木の批判的構えは明白である。

三木はフィリピン徴用時、フィリピン農業の復興と農民の生活向上のテーマに彼なりに取り組んだ。その中で、三木は「文化工作は産業の線に沿って進められるべきである」という原則的観点を確立し、フィリピン農民の収入を増加させるための家内工業の振興なども構想していった。こうした構想が、帰国後、物造りの思想として次第に形成されて行く姿をつたえているものが、「知恵の秩序」^{四四}である。

「我々は真の意味に於て自分を、生産或いは創造即ち物をつくるという立場に客観的に置くことが必要であろうと思う。今日我々が忘れていることは、我々が客観的に物を造るという立場を離れていることであろう。…物を造ることが、やはり今日の知識人の

最晩年の三木のエッセイおよび遺稿は、戦争遂行体制への屈服・敗北をつげるものでもないし、未来の読者に宛てた遺言でもない。

^{四四} 第一九卷の編者、梶田啓三郎によれば、この評論は「昭和二十一年五月『国際女性』に掲載されたが、いつ書かれ、どうして同誌の手に渡ったかもわからない」（一九、九六一頁）という。

重要な考え方の転換でなければならぬのだ。」（「知恵の秩序」一九、八三九～八四〇頁、傍点は筆者）。

三木は「今日の知識人の考え方の転換」が「客観的に物を造るという立場」を軸心として行われるべきだと考えている。しかも「自分で物を造る」立場は、社会秩序を下から自分で造る思想へと展開されてゆく。

「自分の手近な所から、自分の住んで居る社会、国家に新しい秩序を造って行く、秩序の生産創造という考え方、こういう心構えが最も重要である。特に知識階級が、我々は物を造る人間であり、外の人間が造らない物を造ると自覚する所に知識人の本当の誇りがある。…ここに初めて…上からの力によって与えられた秩序とは違う、下からの秩序が出て来る。…あらゆる人間の自由を顧みぬ、上からの力による秩序を受ける事を欲しないならば何をすべきかといえば、自分で秩序をつくるにある。あらゆる知識人は、そういう新しき秩序をつくることの出来る人間としてこそ、知識人の真の価値がある。…本当に暴力的独裁に反対するなら、自分で進んで新秩序を建設して行く精神が、自分の中に生まれなければならない。この秩序の精神こそ最も日本の国民に欠けてはいしないか。この点に於て、一層建設的構成的な合理性、組織性というものが、国民の間に浸潤すべきであり、インテリゲンチヤは、その為に大きな望みを失ってはならぬ。」（同、八四一～八四三頁）。

冒頭で紹介した久野収によれば、この時期は三木が「フィリピンへの強制徴用から帰還し、戦局の前途に絶望してペンをおく」（一四、五八五頁）時期とされている。しかし三木は、「本当に暴力的独裁に反対」して、下から自立的に「新しき秩序」を造ることのできる人である点に「知識人の真の価値」があるのだから、「インテリゲンチヤは、その為に大きな望みを失ってはならぬ」と主張している。「絶望」や「敗北」という言葉ほど、三木の思想に不適切な言葉はないであろう。

わずか一〇ヶ月余のフィリピン滞在であったが、軍政監部スタッフの信任を受けて、フィリピンの歴史、文化、民族性などの研究に没頭した数ヶ月は三木にとってかけがえのない数ヶ月であった。そこには戦争協力か反対かという単純な二者択一では割り切れない戦時期の日本人のさまざまな生の選択があったと思う。

日本のフィリピン占領期の歴史を回顧すると、当時の良心的知識人にとって日本本土に留まっていることが、精神的には一番不幸なことではなかったのかと思えてくる。軍部・政府の人事をとっても国際経験の豊富な、見識のある指導者たちは、むしろ占領地域における軍政の仕事に就いていた。うがった見方をすれば、いわば使い物にならない連中や要領の良い連中がより多く内地に残ったのではなかろうか。そういう連中に限って、「国体明徴」など権威と建前を笠に着ていばりちらそうとする。また占領地域では、政府や参謀本部から送られてくる、現地の実情を考慮しない決定や指令のばかばかしさは一目瞭然であったろうし、「日本精神」や「八紘一宇」などの宣伝を日本人以外のアジア人に伝達し、理解させることのおろかさも明らかであった。全体として現地の軍政担当者達の方が、内地に逼塞していた徴用前の三木自身よりもはるかに厳しい現実認識と柔軟な妥協精神を持っていたようにさえ思われる。

三木がフィリピンから持ち帰った新しい実践的指針、現地の実証的調査・研究を重視し、

パトス・感情に流れず論理を重視し、内地における「後方の観念論」と前線において対決するという指針は、三木の人生にとって決定的な意味を持ったのではないだろうか。少なくとも三木は、自分の言論活動は決して孤立無縁の絶望的な闘いであるという思いからは解放されていたのではないかと思う。

文献目録（アルファベット順）

- 阿部知二(一九五一)「思出」『世界』第七一号、一九五一年十一月号
阿部知二(一九五四)「故里の人物」『改造』一九五四年一月号
阿部知二(一九六三)「裂氷」『文芸』一九六三年一月号～一二月号
阿部知二(一九七三)『捕囚』河出書房新社
阿部艶子(一九四四)『比島日記』東邦社
文化奉公会編(一九四三)『大東亜戦争陸軍報道班員手記 従軍随想』大日本雄弁会講談社
比島調査委員会編『復刻版 比島調査報告』全二巻、南方軍政関係史料⑩、龍溪書舎
比島派遣軍報道部編(一九四二)『比島戦記』
石坂洋次郎(一九七七)『マヨンの煙』集英社
『回想の三木清』(一九四八) 三一書房
今日出海(一九四四)『比島従軍』創元社
今日出海(一九五〇)「三木清における人間の研究」『新潮』第四七巻二号
今日出海(一九七八)『山中放浪』中央公論社
久野収(一九七五)『三〇年代の思想家たち』岩波書店
三木清編集代表(一九四三)『比島風土記』小山書店
望月重信(一九八〇)『比国の国柱』私家版
中野聡(一九九六)「宥和と圧政」、池端雪浦(編)『日本占領下のフィリピン』岩波書店
中野聡(一九九七)『フィリピン独立問題史—独立法問題をめぐる米比関係史の研究(一九二九～四六)一』龍溪書舎
中野聡(二〇〇二)「フィリピン戦没日本人 慰霊の営みと戦争責任の記憶」『季刊 戦争責任研究』第三七号二〇〇二年秋季号
中野聡(二〇〇六)「植民地統治と南方軍政—帝国・日本の解体と東南アジア」、倉沢愛子他編集『岩波講座 アジア・太平洋戦争』第七巻「支配と暴力」岩波書店
中野聡(二〇〇七)『歴史経験としてのアメリカ帝国』岩波書店
日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編(一九九四)『インタビュー記録 日本のフィリピン占領』龍溪書舎
尾崎士郎(一九五四)『人生劇場—離愁篇—』新潮社
酒井三郎(一九七九)『昭和研究会』TBS ブリタニカ
平子友長(二〇〇二)「三木清の思想のアクチュアリティ」『共同探求通信』第一九号
平子友長(二〇〇二 a)「三木清『構想力の論理』の論理構造」『共同探求通信』第一九号
平子友長(二〇〇六)「戦前日本マルクス主義の到達点—三木清と戸坂潤—」岩波講座『「帝国」日本の学知』第八巻「空間形成と世界認識」(山室信一編)、岩波書店
宇都宮直賢(一九八一)『南十字星を望みつつ』私家版
山田宗睦(一九七五)『昭和の精神史』人文書院
読売新聞社編(一九七〇)『昭和史の天皇』第一〇巻、読売新聞社
読売新聞社編(一九七〇 a)『昭和史の天皇』第一一巻、読売新聞社